

十一	野木	雲
十	石川	雲
九	浅野	雲
八	桐	雲
七	山	雲
六	山口	雲
五	尾	雲
四	宮	雲
三	宮	雲
二	河	雲
一	八	雲
	三	雲
	福	雲
	山	雲
	山	雲
	川	雲

# 神奈川縣教育會

第貳百七拾號



神奈川縣教育會

大 25  
29

神奈川縣立大學  
校印

Kodak Gray Scale

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

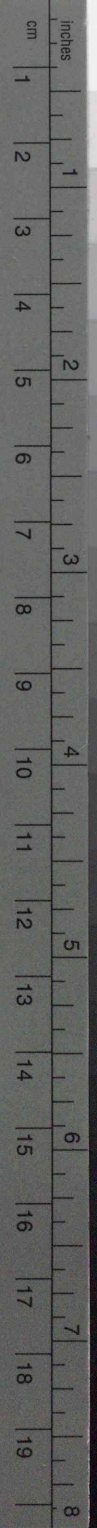


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

- Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





卷頭言——青年教育の更張……………(一)

所感……………田中隆三……………(二)

國產海軍……………武富海軍大佐……………(三)

何故宗教を教育の基調とするか……………中根環堂……………(一六)

寫眞電送……………上島憲次……………(二〇)

安定時代を聴く……………(二六)

和歌鑑賞に現れたる生徒の心情……………三獄作次郎……………(二七)

K子の母と語る……………高梨幹雄……………(三〇)

大學の勅語奉讀式……………(三二)

父はその子に斯くした……………相原武夫……………(三三)

微笑さへ浮べてゐる……………田川定一……………(三五)

石橋山古戰場に往年を偲ぶ……………石野瑛……………(三七)

石橋山戦争の地理……………佐藤善治郎……………(四二)

ヘルーの甘蔗栽培……………(四八)

源頼朝……………大森金五郎……………(四九)



行進キヤンプ、ファイヤート……………小菅一男……………(六六)

確かな認識を目指して……………小林錠太郎……………(七一)

蝗虫食の奨励……………青木孝太……………(七三)

高二幾何教授方法概論……………内山彦太郎……………(七四)

多摩御陵及び高尾山案内……………笹子武夫……………(七七)

縣民讀本の發行……………(八一)

短歌……………(八二)

俳句……………(八三)

家事裁縫の指導をうけて……………熊坂ユウ……………(八四)

世界教育思潮大觀……………野路當作……………(八七)

第廿六回關東聯合教育會……………(九一)

圖書紹介……………(九五)

雜纂

講演者派遣



『教育評論』主任訓導界主幹 水木梢著 □好評嘖々・注文殺到!!

# 最新刊 教育生活 我等の正當防衛

四六版約二百頁  
定價金六十錢也  
送料金六錢也

今や教育界の迫害、教員の虐待はその極に達し、武陵桃源の夢を食りし我が教育界は、此の晴天の霹靂の現狀に意氣沮喪し、その對策をも講じ得ず、全く喪家の犬の如く、何等爲す所ない。此の意氣地なき教育界を見縊りて、專横の行動を敢てし教育界を混沌に陥らしむるは我が町村當局である。彼等は教員の減俸、俸給不拂、誠首等、全く傍苦無人の處置を平然として行ひ、しかも一方我が文部當局は一片の通牒を發してその反省を促す程度の微温的對策を講ずるのみである。弱き者汝の名は小學教師なり』の烙印は我が小學教師の額に印せられたのである。しかもこの危急存亡の際に起ちて、我が憐むべき二十萬小學教師のために、町村當局と闘ふの士がない。起てよ我が教育者諸賢、諸君は許されたる正當防衛の傳家の寶刀を抜くべき秋に、正に際會してゐるのである。悲憤の士は來りて著者の獅子吼を聴かれよ。

文學士 田中貳郎・稻村玉雄兩氏・水木梢氏分擔執筆 □全三卷一揃・分冊賣嚴禁

# 學級教育實際叢書

菊版總頁約七百頁  
定價三圓六十錢也  
送料金十四錢也

本叢書は學級教育經營の理想的參考書として編述されたるもので、各卷何れも好評嘖々の良書である。學級王國建設の念願に燃ゆる士は是非一本を購つて伴侶とされよ。  
第一卷 學級擔任學 (水木梢著)  
重大なる使命を有する學級擔任訓導の唯一の參考書である。本書によりて學級教育の本質的實際的解決をなすことが出来る。  
第二卷 實地授業の難關の切抜け方 (佐橋敏雄著)  
學級教育の大部分は教授によりて占められ、然して一教授には必らず二、三の難關を伴ふ。本書はその解決を示して餘りなしである。  
第三卷 操行學業成績の褒め方と戒め方 (稻村玉雄著)  
操行身體及び學業の成績については教師及び父兄の懇切なる指導が必要である。本書はその指導要領を詳述してある。

## 青年教育の更張

明治神宮御造營工事に赤誠奉仕した全國青年の功績認められ、神宮鎮座祭に際して、内務省主催の全國青年團代參者大會が開催され、東宮殿下は大會出席の青年を高輪御所に召され、優渥なる令旨を賜はつたのである。

國運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツト多シ諸子能ク内外ノ情勢ニ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ盡シ奮勵協力以テ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム  
大正九年十一月二十二日

本年は令旨奉戴十周年に當り、文部省では青年教育の更張を企圖し、令旨奉戴十周年記念祝典並に表彰式を十一月二日に行ひ、翌三日には全國男女青年代表者の御親閱を仰ぐのである。

青年團體の起りは鎌倉時代にあると言はれてゐるが、所謂若衆組より青年會時代を経て青年團時代に進み、社交中心より事業時代を経て修養中心の今に到つたのである。斯の發達過程に於て、殊に青年會時代前より青年の自覺、年教育關係者及び指導者、爲政者の指導獎勵等各方面の力が流動して來たのである。

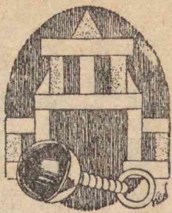
皇室におかせられては青年の進展に深く御軫念遊ばされ、曩には令旨を賜はり、大正十四年五月には、兩陛下御結婚滿二十五年の御祝儀に際し、男女青年團體事業獎勵の思召により特に内帑金七拾五萬を下賜せられ、今上陛下行幸の際も一再ならず青年の御親閱を賜はるのである。洵に聖慮宏大にして深遠、感激に禁へない次第である。而して本縣青年は昭和三年十二月の御親閱に列して感激新たなるに、今また全國青年と共に御親閱を賜はるの光榮を重ねるのである。更に本縣が皇室との關係特に深き位置に在ることも併せ考へると、聖旨を奉體すること一層厚く、武相青年の修養を強調し、青年教育を更張して、國運進展の基礎を培ふことに益々勵むべきである。

東京 西二 巢四 鴨五 町〇 高踏 社 電話 大塚一〇七六番 七五四四七

今上天皇陛下、皇太子におはしましし時、畏くも大正九年十一月令旨を賜ひ、國運進展のため青年の修養をお奨めになりました。爾來十年、外には世界大戦後の動搖あり、内には未曾有の大震災があり、國家多事でありましたが、全國の青年諸君は令旨を奉じて固く一致團結し、又心身を錬り或は修學に或は習業に常に怠る所なく、機會あるごとに社會公共のために盡して居るのは、實に頼もしき次第であります。尙内外の情勢と當今の世相とを察するに、内に於ては國本を固うし産業を振興して民生の幸福をもたらし、外に於ては國際協力の精神を發揮し人類平和の慶を共にする必要があるのであります。此の如き時代に當つて青年諸君の使命は甚だ重大であります。青年は實に次代の國家を負擔すべき人々であつて、青年の力がよく新しき時代を導き來ることは、明治維新の事實が鮮かに證明して居ります。諸君が令旨を奉戴し忠孝の大道を守つて斷えず奮發努力するところに、國民精神は常に一層新しい活氣を呈すると共に、國家の洋々たる前途を祝福し得るのであります。之に反して諸君が若し堅實剛健の風を失ひ輕薄懦弱に流れるならば、國家の將來は深憂に堪へないのであります。

青年諸君。當年の 東宮殿下は今や長くも大業を繼がせ給ひて萬機をみそなはし、日夜御勵精の趣は承るに畏多いものがございます。而して當代の青年に如何に御期待が篤いかは、行幸の折々に多くの青年を御親閲あらせられ、時には雨中長時の御賜閱さへありましたことなどによつても窺ひ奉ることが出来るのであります。

令旨奉戴十周年を記念するに當り、青年諸君が今後一層修養を努め、奮勵協力して聖旨に副ひ奉らんことを希望して止みません。



## 國 產 海 軍

横須賀鎮守府 武 富 海 軍 大 佐

今日我が帝國は色々な意味に於て國難に直面してゐるが、經濟財政の國難もその一つである。その國難を打解する一つの方法として國產奨勵が叫ばれてゐる。而も此の聲は朝野を擧げての熱烈な叫びである。上は總理大臣から下は小學校の兒童に至る迄口々に唱へてゐる。全く今日は國產奨勵を最大の急務とする時代であつて誠に結構なことである。之に對し日本國民としては誰も異存はない筈、茲に於て私は我海軍を擔ぎ出して國產奨勵の活た手本として國民の前に紹介して見たいと思ふ。

今一つ私の願望がある。それは此の機會に於て幾分なりとも海軍に對する理解を國民の間に植へ付けたい事である。申す迄もなく我海軍は 陛下の海軍であり、それが即國民の海軍である。海軍の經費は國稅の中から貴衆兩院の協賛を経て支出される。斯くして物は出来る、この物を使ひこなす爲の人即ち士官兵員は矢張り國民の中から出て來る。殊に海軍は志願兵制度を採つて將來も愈々此の制度の妙用を發揮せんとしてゐる。即ち徴兵適齡に達せざる青年の中から志願に依つて選拔し、之を採用して長期間特種の教育を施して、海軍の所謂下級幹部となすのである。

海軍が整備し、其の内容が充實して實力が向上する爲には、どうしても國民の海軍に對する理解が先決問題である。正しき理解には必ず暖き同情が伴ふものである。この理解と同情とを我等海軍將士は望んで已まないのである。

殊に今日は世界的に見て海上雄飛の時代である、少くとも海軍を経済的に最も効果的に整備せんとする世界的競争時代である。その爲に度々海軍に關する國際會議が催されてゐる。華府會議然り、壽府會議然り、英佛協約然り、國際聯盟然り、倫敦會議亦然りであつた。

日本に關する限り此等の會議には、何時も國民の代表として全權が派遣されてゐる。全權は國民を背景として仕事が出来来る。背景のない全權は無力である、案山子同様である。そこで國民一致の輿論の力を以て、我が全權を後援し、帝國の正しき主張を國際間に貫徹せねばならぬ。

その力強き正しき國論は何に依つて起るか？ 申す迄もなく海軍に對する理解である。理解が基で國論が起るのである。過去の色々の國際會議に於て我が國民の態度は、何時も不十分の様に思はれた。我が全權を鼓舞督勵する上に於て欠くる處があつた様に思はれた。従つて我が正論が通らず結果は不十分であつた。

過去は追ふも詮なし、將來を戒めてお互は今から充分に準備をして置かねばならぬ。

抑て今日の我が海軍を一言にして云ひ表せば國產海軍の四字で盡きてゐる。第一線部隊の凡ては和製である、従つて舶來臭ひの所は一つもないのである。云ひ換ふれば國產獎勵の徹底した結晶物が我が海軍である。

その海軍は英、米と並んで世界三大海軍の一つである。世界列國は我海軍の實力に向つて敬意を表してゐる。敬意の存する處に三大海軍國の面目があり、一等國として名譽もあり、従つて世界の檣舞臺に立つても重要な役目を演じて得るのである。國際的立場と密接不可分の關係にある我が海軍が、純國產たる事は實に此の上もない愉快なことであらねばならぬ。

抑も此の國產海軍の建設は今日突然出來上つたのではなく、二十五年前にその努力の一步を踏み出したのである。二十五年前は日露戰爭の濟んだ明治三十八年である。この戰役の結果我が日本は世界の一等國となつた。自然英、米、獨、

佛、伊と肩を並べる様になつた。

斯様に局面が變つて見れば、自ら日本の競争目標も新になつて來た。それは外でもない東洋の天地に最も利害關係を有する英と米と獨とであつた。それと同時に太平洋に世界列強の耳目が集中して來た。のみならず海上勢力が此處に移動して來たのだから、我國は地理的立場から觀ても、大に覺悟を要すべき秋となつた。

日露戰爭迄の我が海軍はどんなものであつたか、外觀内容を検討して見れば、それは残念ながら外國式であつた、西洋式であつた。中にも英國式が九分通りを占めてゐた。それはその筈である。日本海軍は明治維新後から萬事英國に師事して來た。軍艦、兵器、彈藥、機關等一切の物は彼に注文して造つて貰つた。教育訓練の方法も教はつた。

斯くして西洋式海軍が日本に建設され、漸次發達した。我々の最も尊敬する東郷元帥の如きも、青年のとき英國に留學し、彼の地に海軍を實地に七年も稽古して歸朝された様な次第であるから、日本海軍の古い將官連も皆大體同様に西洋式の教育を受けられたのである。

斯の如き模倣時代があつた事は致し方ない。之は海軍のみではない、社會各方面とも西洋文明の急速吸收に追はれて自然拜外追従の風を馴致した。社交、風俗、教育、産業、皆然りである。之は過度時代の當然、スせねばならぬ事とは知りながら、其餘毒の滔々として今日に及んでゐるのは實に遺憾千萬といはねばならぬ。

兎に角形の上に於て我國にも西洋式海軍が出來上つた。魂は立派な日本魂であつたことは申す迄もない。所謂洋形和魂の海軍であつた。

前述の通り二十五年前日露戰爭後舞臺が廻轉して、日本の國際的立場が六大國の一となつた。そして當然日本の相手が新たに生じた譯である。當時我國としては戰費に國帑を減らし、財政的には到底英、米、獨などの敵ではなかつた。勢ひ相手は出來ても寡を以て衆に當らねばならぬ苦しい立場に置かれた。

時代は太平洋、相手は英、米、それに寡を以て衆に當らねばならぬ。そして一等國としての面目を保持し、東洋諸邦の盟主としての使命も果さねばならぬ。此間に處して、果して我海軍が従來の様に他力本願の西洋式であつて可なりやとは、海軍將士の誰の胸にも自然に起つた疑問であつた。萬人の答は一であつた、曰く「海軍の獨立」であつた。

他力より自力へ——他給他足より自給自足へ——模倣追従より獨創指導へ——の勇ましい進軍の號令にも比すべき大自覺であつた。嗚呼此の大自覺——誰云ふとなく胸から胸に傳はつて「海軍の獨立」は全海軍の標語となつて、凡ての魂を此處に導いた。

日本式海軍の建設へと凡ての努力は集中された。技術家も用兵家も、軍政も、軍令も皆同じ方向に研究努力の歩を進めた。蓋し近代日本海軍が世界的進出へのスタートであり、其の武者振は實に雄々しき偉觀であつた。

人間の自覺に基づく努力の効果は偉大なものである。ましてや唯々忠君愛國の純情にのみ燃ゆる海軍軍人が、皇國日本の防護の爲に、更に極東平和の維持の爲に、決然として立つた其姿は勇ましくもあり、其効果は絶大なものであつた。明治四十年には軍艦筑波が吳海軍工廠に於て竣工した。一萬四千噸の装甲巡洋艦であつたが、十二吋砲を四門搭載してゐた。世界海軍國を捜しても巡洋艦に十二吋砲を搭載してゐるものは一隻もなかつた。筑波は當時世界の注目を惹いたことは勿論である。筑波に次いで姉妹艦の生駒、鞍馬、伊吹が日本に生れた。鞍馬と利根は、明治四十四年に英國皇帝の戴冠式觀艦式に參列の爲め、遠く派遣されて列國環視の中に國産日本軍艦を紹介した。

その次には戰艦安藝、薩摩が出来た。二萬噸に近い大艦で、十二吋砲を四門、十吋砲を十門も積んだ恐るべき攻撃力を備へた軍艦であつた。是亦世界専門家の間に驚異の話題となつた。之に次で河内、攝津が生れたが更に一層強い戰艦であつた。

斯様にして着々と世界的に優れた軍艦が日本で出来る様になり、従つて日本及日本人の力——科學能力に就て相當世

界の尊敬を享ける様になつた。

驅逐艦も舶來を國産に代へ、技術の向上と相俟つて設計も思ひ切て遂に大型驅逐艦海風、山風を造り出した。之と同じ時に此等國産艦船の内容となるべき製鐵業、中にも装甲板、大砲、水雷、彈丸、火藥、機械、汽罐、電氣器具其の他も漸次國産と代る様になつた。

この「海軍の獨立」運動に關聯して、國內工業も多額の資本を投じて勃興し、且つ多數の技師、職工を海外に派遣する様になつて、その進歩發達を非常に促進した。此の時代を民間工業の發芽時代とも創始時代とも云ふことが出来る。即ち日露戰爭直後より大正元年頃に至る期間を海軍の國産轉換期となすので、畢竟世界の大勢が日本をして國防に即して此の奮起を喚起したのである。



大正三年から七年にかけて、國産軍艦として三萬噸以上の戰艦扶桑、山城、伊勢、日向が竣工した。巡洋戰艦として二萬七千噸の比叡、榛名、霧島が出来上つた。

(註金剛は大正二年八月英國にて竣工、是が外國注文の最後の艦である)

右は孰れも戰鬪力に於て世界有數のものであつた、同時代のもを比較すれば大體次の通りである。

國別	艦種	排水量	主砲	魚雷發射管	速力
日本	伊勢級	三一、〇〇〇噸	三六センチ砲一二門	六	二三節
米國	ニューメキシコ級	三二、〇〇〇噸	同 一二門	二	二二節
英國	ラミリス級	二六、〇〇〇噸	三八センチ砲八門	四	二三節

然しながら世界列強から最大の注意を喚起したのは、長門、陸奥の出現といはねばならぬ。長門は大正九年吳海軍工廠に於て、陸奥は翌十年横須賀海軍工廠に於て竣工した。當時列強海軍はどうであつたか。

國別	艦種	排水量	主砲	魚雷發射管	速力
日本	長門、陸奥	三三、八〇〇噸	四〇センチ砲八門	八	二三節
米國	メリーランド	三二、六〇〇噸	同 八門	二	二二節
英國					
佛國					
伊國					

大正六年以降戰艦にて竣工したるものはない、既製戰艦は何れも長門陸奥に比し遙かに劣勢である

本表に依ると、陸奥、長門と比較になるのは、世界中で米國の「メリーランド」のみであるが、内容を検討して我は彼に比し優勢なりとの感を誰しも抱くのである。

依つて陸奥、長門に對する外國海軍専門家は大に神經を失らした。彼等の批評は大體次の様な結論であつた。

「陸奥、長門は其の要目に依ると成る程素晴らしい戰艦である。然し之は日本が世界戰亂の中心より遙かに遠ざかり、數年の日子を費して建造したものである。吾人は戰爭に忙殺され自國海軍を整備する暇がなかつた……」

彼等は言外に「吾人も造りたい、造つて見せる。」の意味を現はしてゐた。之は確かに先進海軍國を以て自負する歐米人の代表的の評言である様に思はれる。

果して大正十年の末から十一年の初めにかけて開かれた華盛頓會議の際陸奥廢艦問題が勃發した。

正に明かに竣工してゐる陸奥を英米では未成艦と見做して之に廢艦の宣告を下そうといふのである。之には無論我全權も反對であつたが更に一層強き反對の態度を取つたのは我國民であつた。國民の輿論は喚起されて期せずして英米の提議に強く反對した此の國民の意志は直ちに會議に反映して、彼等も遂に陸奥の復活を認める様になつた。然し彼等は轉んでも只は起きない、所謂交換條件を持ち出した。

即ち陸奥と同等の軍艦を英米各二隻宛將來造る權利であつた。之は實に無理な事である。無理が通れば道理は引込むが、昔から長いものには卷かれるの諺もある通り、何とか纏めたい國際會議であるから、遂にこの交換條件が成立した

そこで英國では其の後五年の日子を費し、多大の國帑をかけて三萬五千噸十六吋砲九門速力二十三節 いふ素晴らしい「ロドネー」「ネルソン」の二隻の戰艦を造り上げた。米國では三萬二千噸十六吋砲入門速力二十一節の戰艦「ウエスト、バディーニア」と「コロラド」の二隻を作り上げた。

英國々民は「ロドネー」「ネルソン」を世界第一だと鼻高々の有様であり、米國も「ウエスト、バディーニア」「コロラド」「メリーランド」の三隻を持つて満足の態である。

此の間の消息を、前述した陸奥、長門に對する歐米専門家の批評と併せ考へたら成る程と思ひ當る事がある。

所詮は陸奥、長門の出現は確かに先進國を以て自任する英と米の自負心を傷けたに違ひない。斯様な國民的感情は外交上の問題となり易いのである。偶々華府會議でそれが爆發したといふ迄の事である。今日迄の世界歴史を見ると、一強國或は一英雄の自負心が傷けられたとき、其處に問題が生じ遂に戰爭にまでなつた例は決して尠くない。

今日の各國々民は決して完全なものでない、無論神や佛の足元にも及ぶものでない。凡俗衆愚の團體に過ぎない、争の種となる感情——自負心を多分に持合せてゐる。口は調法で世界の平和人道などと譯もなく吹聴するが、腹は違ふことが多い。疑つてはならぬが同時に欺かれてはならぬ。一身一家の些事ではない。一國の生命を托する國防に關する最大無上の重要事であるからである。

「ロドネー」「ネルソン」は英國民の最大の誇りとなすだけ、新味に富んだ最大最強の艦の様である。その設計の中で直ちに目に付くのは、十六吋砲九門を三聯裝として砲塔三基に裝備し、之を艦の約中央部に集結し、更に汽罐室、機械室を其の直後に置いてゐる點である。艦の中央部は艦體を浮泛する力の最も大なる部分である。其處に艦の生命である攻撃力、速力の大重量物を集めて居るから、頗る無理のない理想的的設計といはねばならぬ。其の上に此等の大切な重量物を防護する爲に、中央部に限り堅牢なる舷側甲板を付し、又空中襲撃に對する甲板防禦を施し、更に水中防禦として



は「バルヂ」を持てゐるから、艦全體より見れば大に經濟的の防禦法である。従つて艦の前後部は軽く出来てゐる。以上の特點は彼等の所謂新らし味であり長所であるが、考へ方によれば之が短所であり欠點である様でもある。

扱て然らば日本の造船界は此の二隻の艦に對し兎をぬいで居るかと思へば、決してそうではない。陸奥、長門の後に八八艦隊の計畫により尾張、紀伊、加賀、土佐の四隻の戦艦が出来る様になつてゐた。その内加賀の如きは大正十年には進水を済ましてゐた。此等の設計は排水量こそ「ロドネー」「ネルソン」より更に大であつたが、同時に攻撃力防禦力に於ても遙に大であつた。

日本に於ては「ロドネー」「ネルソン」より六七年前に斯様な優秀船の設計があつた。之は華府會議の結果廢棄となつたから、今日は戦艦として存在しないが、其の後六、七年も経つてから、英國に「ロドネー」「ネルソン」が出来たからと云て敢て驚くにも價すまいと思はれる。

兎に角華府會議に於て英米は陸奥の完成期に就て難辭を付け、其代償として遂に英は「ロドネー」「ネルソン」を、米は「ウエスト、ハデニア」「コロラド」を造つたから、今日世界の海上に於て七大戦艦(十六吋搭載)が存在してゐる譯である。

然るに七大戦艦中我が陸奥、長門の二隻は一番先に造られたもので、大正九年頃から少くとも五ヶ年の間は、世界軍艦の最先頭に立つたものである。斯くの如く世界第一と折紙をつけられて列強海軍を「リード」したのは實に國產軍艦であつた。

國產軍艦の内容優秀を以て、世界の耳目を聳動し、延ては國際的問題とまでなつた事は確かに帝國海軍の世界的進出への劃時代のものであつたと解せねばならぬ。茲に陸奥、長門の存在の意義があり、同時に國民的誇りも存在する次第である。

□

華府會議後の時代はどんな時代であつたかと申せば、補助艦競争時代であつた。これは主力艦に對する各國割當量、即ち比率に無理があつたから、補助艦を以てその欠を補はんとする國と、主力艦の優勢を更に補助艦にまで延ばさんとする國とがあつて茲に自然に補助艦競争の形を馴致したのである。

此の時代に日本では國產軍艦として巡洋艦の古鷹、加古、青葉、衣笠の四隻が生れた。排水量は僅かに七千百噸に過ぎないが、八吋砲を六門と魚雷發射管を十二門持ち、速力は三十三節以上といふ素晴らしいものであつた。

そこで此が亦世界の問題となつた。英米の海軍専門批評家は云つた——日本の古鷹級の要目はどうしても自分達には了解出来ない。故に何等か日本の發表には數字上の間違があるに違ひない——ここである。更に彼等は云つた、あの攻撃力とあの速力を持つ爲には九千噸以上一萬噸になる、七千百噸で納りが付いたとはどうしても信じられない。

成る程御尤もな次第だが、そこに日本式獨創があるとは思ひ付かなかつたらしい。何時迄も日本が西洋式の後塵を拜んでゐるものと考へてゐたらしい。そこで前述の様な結論になつた。

其の後英米は色々な手段で古鷹級の内容を探りを入れたのは事實である。我海軍としても軍機に涉る點もあるので相當に用心して掛つたのである。

それは一體なぜそうか、なぜ神經を尖らしたかと申せば、當時西洋の巡洋艦は英國の一萬噸級を除いては一隻も八吋砲搭載艦がない。皆六吋砲を搭載してゐる。嚴格に云へば八吋砲を搭載したくても造船學上出来ない事になつてゐた。

そこで自然八吋砲と六吋砲との戰鬥力の優劣になつて来る。八吋砲と六吋砲とは砲口の直徑に於て僅かに二吋の相違であるが、その實力は比較にならぬ程の違ひである。即ち六吋砲の彈丸一發の重量は約十二貫であるが、八吋砲になると三十貫以上になる。依つて敵に與ふる損害の程度は格段の相違でなければならぬ。又此の兩種の砲を同じ仰角で同じ初速で打出したとすれば、當然三十貫の巨彈が十二貫の彈丸より、遠距離に達する。

古鷹級は二萬米以上の敵を打つことが出来るが、六吋砲の外國の巡洋艦は一萬五六千米以上に達しない。

そこで古鷹級が三十三節の高速力を利用して敵艦の到達外に位置を占め、其處から三十貫の巨弾を敵に浴びせて居れば、勝利の榮冠は直ちに我に冠せられる事となる。科學の進歩したる今日、一望千里の太平洋上に於ては、陸上と違つて白晝何等術策の施し様がない、只力の相違のみが結末をつけて呉れる。その内でも緒戦期の有利が大切である。即ち出合頭の一撃が最も効目がある。

先制の利である、先手先手と打つことである。

宜なる哉古鷹級が壽府に於ける第二回軍縮會議の際、直接間接に問題の種を作つた。この國際大會議は不幸にして壊裂したが、その理由は英米の正面衝突であつた。即ち英國は本國と屬領との間の海上交通の確保を七十隻の輕巡洋艦（六吋砲艦）に依らんとし、米國は渡洋作戰上世界第一の一萬噸巡洋艦（八吋砲艦）を保有せんと主張した。

双方とも國策遂行上の打算ではあるが、裏には裏がある。兎も角も八吋砲六吋砲の係争であつた事は事實である。初め英國は條約を以て古鷹級の頭を押へんとしたが奏功せず、遂に前記の様な英米の衝突となつて破裂した。

この會議は各國とも得る處がなかつたが、日本としては補助艦に對する英米の腹が讀めた事がせめての收穫と云はねばなるまい。

其の後英米の間は互にいやな思を抱きながら段々疎隔した。そして政治家の手に依つて英佛、英米の協商了解などの手順を経て、遂に今次の「ロンドン」海軍會議に迄漕ぎ付けた次第である。

「ロンドン」海軍會議では古鷹級四隻は外國の一萬噸級の仲間入をした。したのではない寧ろさせられたのである。一萬噸八吋砲巡洋艦は華府條約所産の大型巡洋艦で、所謂條約型であるから時代を代表する最も有力な巡洋艦である。その仲間七千百噸の日本巡洋艦四隻が這入つた。どうして這入つた？ 身體の小さい癖に途方もない大きな拳固と草駄天の様な速い脚を持つてゐたからである。

仲間入りの名義は八吋砲巡洋艦と云ふのである。それには一言ない、確かに八吋砲搭載の巡洋艦であるからである。これは喜んでよい事が將た悲しまねばならぬ事か……それは諸君の御判断に任せる。

（註英國の大型巡洋艦の中に古鷹よりズツト後に出來た八千五百噸級の八吋砲巡洋艦二隻がある）

扱て今日はどんな時代かと申せば、それは一萬噸巡洋艦の時代であると云つて差支あるまい。

この種の艦は、前述の通り條約型巡洋艦である。即ち華府會議に於て許された巡洋艦の最大排水量のものであり、同時に最大口径の大砲の持主である——一萬噸八吋砲——是である。

英國は列國に先んじて此の大巡洋艦を建造した。今日では「ロンドン」「ゲント」「サツフオーク」「パーウキツフ」等八隻以上も竣工してゐる。

米國は僅かに竣工艦として「ソルトレーク、シチー」「ペンサコラ」の二隻を有するに過ぎない。他は建造中である。日本はどうであるかと云へば、古鷹級の後に直ちに建造されて今日では妙高、那智、羽黒、足柄の四隻が竣工就役して居り、愛宕、高雄、摩耶、鳥海の四隻は未成艦ではあるが、本年中に進水を了することになつて居り、やがて二年の後には全部竣工して勢揃が出來ると思はれる。

而して此の時代の代表艦を比較して見ると、矢張り日本のが世界の何處のよりも優れて居るのが目につく、その要目は大體次の通りである。

國	別	艦	種	排水量	主砲	魚雷發射管	速力
日	本	那智	級	一〇、〇〇〇噸	八吋砲 一〇門	一二	三三節
英	國	ロンドン	級	一〇、〇〇〇噸	八吋砲 八門	八	三二、二五
米	國	ペンサコラ	級	同	八吋砲 一〇門	六	三二、五

内容は右の通りであるが、外觀を比較すれば英米のは十年一日の如き型であるが、日本のは全く舊態を一新して特種の型をしてゐる。

一萬噸巡洋艦の重要性は今更云ふ迄もないが、念の爲め簡略に其の要點だけを述べて見る。

### 第一 速力の優越

我那智級の如きは一時間三十三節以上も出して居る。速力は戦闘力中の一要素であつて頗る大切なものである。即ち己れより強き敵——例へば戦艦、巡洋戦艦の如きものに出遇つた場合は、巧に之を避けることが出来る。斯くして日中は避戦し、夜陰之に接近すれば却て有利となる事がある。之に反し己れより弱き敵であつた場合は、遠慮なく之を追ひつめて猛撃を加へる事が出来る。故に戦闘をやるもやらぬも速力の優越なる艦の選み得る特権である。

而してこの大切な速力でも天候が悪く、怒濤の中では充分に出せないのが普通であるが、一萬噸の大型になれば先づ天候の如何に拘らず三十節以上出せるのである。小巡洋艦や駆逐艦などはそうは行かない。此等小型の船は天候に左右されること夥しいのであるから到底大巡洋艦とは比較にならない。

### 第二 攻撃力の優越

大巡洋艦の八吋砲と、小巡洋艦の六吋砲とは、其の戦闘力に非常の差違あることは前述の通りで、到底小巡は大巡に對して齒が立たない。出遇頭に一撃を喰つて短時間に片付けられて仕舞ふ。戦闘の勝敗は正に最初の五分間に決まると云つて差支はない。

又大巡は最も發達した恐るべき魚雷の發射管を澤山持つて居る。那智級の如きは十二門も持つてゐる。是が晝戦にも役に立つが、夜戦には特別に効果がある。故に大巡は晝間の「ヒーロー」であると共に暗黒に怒る夜叉である。

### 第三 航續力の優越

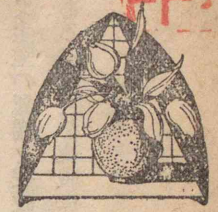
燃料として重油を満載して、米國の一萬噸級が太平洋に飛び出したと假定すれば、途中何處にも立寄ることなくして太平洋を東より西、西より東へと往復して尙餘裕綽々たるものがある。其の航續距離は優に一萬哩を超へて居る。

我が日本國民は今迄太平洋は廣い、渡洋作戦は最も困難である、日本は太平洋の西隅に國を成して、天恵の地利に據り安價に國防を全くし得るものと考へてゐた様だが、此の感念は一萬噸の出現に依て打破されねばならぬと思ふ。之も時代の齎らす脅威である。

### 第四 戦略戦術上の優越

戦時太平洋に於て軍艦としても随分役に立つことは勿論だが、特に之を通商破壊用に使用したら眞に天下無敵である世界大戦に際し獨逸の小巡洋艦「エムデン」一隻が印度洋南太平洋にあげられた時、如何に聯合國が損害を蒙り奔命に疲れたかを追想すれば容易に了解出来ることである。

又此の艦を編隊して使用すれば、遠く敵地に進出し移動集散、其の戦略的價値の絶大さは申す迄もない事である。之を彼我大艦隊の決戦に使用すれば、敵の哨戒線を突破して敵主隊の所存を探り、之を味方に通報してその展開を助け、又主隊の翼端を援護し、或は水雷戦隊の敵方推進を扶け、機に乗じては自ら進んで敵の翼端を脅かす等の大切な任務がある。又之を夜戦に利用すれば最も重大なる場面を受持つことが出来る。(未了)



# 何故宗教を教育の基調とするか

中 根 環 堂

満たさんとするに至るものである。

宗教が總ての政治にも、實業にも、將た労働にも、其他あらゆる業務にも、其根柢とならなかつたならば、百害あつて一益もないと信ずる。隨て教育にも宗教が基礎とならなかつたならば、教育が熾んになればなる程、弊害多くして、人間は唯輕薄となつて、世の中を要領よく渡り、利己一邊に走つて自己の優越權のみを得んとするに汲々として人の迷惑や困難を更に顧みず、社會に害毒を流すのみである。今日智能犯の日に月に増加するのを見ても、之を雄辯に證明してゐる。政治も亦斯の如く宗教を基礎とせざる時は、單に私利私慾を恣まゝにするものにあらざれば、黨利黨益のみを貪るものである。國家の損失も社會の迷惑も構はないのみか、寧ろ社會國家を手段にして、自己の慾望を

今日政治家の頻々として收賄事件、背任問題、利權問題の續發するのは、彼等に宗教的信念の缺乏を示して餘りありと言ふべきである。世界の政治家には一の信仰心を有たぬものは殆ど無かつた。我が國は祭政一致の國柄である誰か神を祭ることを忘れて、眞の政治を執ることが出来るか。其他如何なる職務に従事するも、宗教的信念を根本とせざる時は、總ての行動は悉く我利我慾となつて、秩序を紊亂し、社會を惡化するのみである。此の意味に於て宗教は凡ての研究、總ての行爲の基調であると同時に、又教育の根柢であることは明である。是れ今日、時代の要求として總ての方面に活動する源泉となるべき教育に、宗教を基調とせねばならぬといふことは、當然の歸結といふべき

である。

## 二

茲に宗教と云ふのは、既成宗教の佛教とか、基督教とか或は回々教とかを指すものではない。如何なる宗教にも通ずる、根本的本質を意味するので、其の本質に契つて居ないものは、如何に立派な形體を具備して居つても、それは茲に言ふ宗教とは異なつたものである。

吾人の云ふ宗教は最終的の意味に於て、吾々の價值活動の一切を成立させる根本原理である。然し宗教の價值は他の道徳や、美術や、眞理の諸價值と同格に見做すことの出來ないものである。宗教は單なる價值ではなくて、價值中の最高價值である。眞理や道徳や美術の價值判斷の行き詰つた所が宗教であると云ひ得るのである。即ち正邪、善惡美醜を超越するところに神は見出さるゝのである。總ての相對を超越したる所は見方に依ては無である。而し此の無は絶対の無にして、數學上の零ではない。幾何學上の空間と同様に、其の中に總ての線を成立せしむる基礎であり根源である。故に其の無は零の意味ではなくて、無一物中無盡藏の無である。

されば活動の生ずる無であり、生命の湧き出づる無であり、又萬物の生ずる無である。此の無に依て眞善美、其他あらゆる價值の世界が成立するのである。故に宗教は價值中の絶対價值であるといふのである。

## 三

絶対價值の標準を何れに求むるかといふに、自己の生命が宇宙全體に對する生存に關係する時、初めて悟得することが出来るものである。故に自己を宇宙大に擴張する處に神なるものを見出すのである。故にその自己を否定するものは神を見出すことは出來ない。例せば單に自己一身の生存のみを考へて利己的行爲のみ走る時は、其自己は單なる個人大の自己に過ぎない。けれども單に自己のみでなく、全責任を以て家族全體の生存を圖る時は、其自己は家族大に擴張されて、其自己の榮枯は一家の盛衰に關係するものである。更に家族大の自己のみでなく、一村一縣の爲に一身を犠牲に供して、一村なり一縣なり一國なりの生存に關係する自己は、其自己の消長に依て、其の一村一縣一國の安危をトするのである。

一國の安危は宰相の賢不肖に關係し、一縣の興廢は知事の明不明に關係し、一村の盛衰は村長の敏不敏に關係するのである。

更に進んで國境を超越し人種を超越して人類全體の生存を救済せんとする釋迦、基督の如き自己は世界大に擴大せられたのである。更に一步を進めて、自己が人類のみならず、生物も無生物も一切を包含せる宇宙全體の生存に關係し、宇宙の生命と自己の生命と同一體に關係する時、宇宙の生命は自己の生命となり、宇宙の大精神は自己の大精神となつて、茲に眞の神は現成するのである。

此の状態を釋尊は有情非情同時成道と道破せられたのである。故に靈の世界とて現在の生存を離れ肉體を離れてあるものでない。生存そのものが宇宙全體と關係し同一體となつた時が靈の世界であり、神の世界であり、淨土であり極樂であり、ユートピアである。

この太靈の世界への憧憬する行爲が、人間の宇宙全體に對する責任感である。これぞ人間としての最高の氣分である。この最高の氣分を離れて、部分的利己的行爲を爲すことに依て、自己を縮少し、遂に廣き宇宙の中に身を容るゝ

所もなきに至るのである。故に宇宙大に自己を擴大したる天人合一の靈なる聖域を離れた科學も、教育も、道德も、藝術も、總てのもの皆悉く失敗に終るのは當然である。

宇宙全體に對する責任、即ち靈なる聖域の觀念を離れた個人的自己中心の行爲が、資本主義の壓迫となり、社會主義の横暴となるのは、當然過ぎたほど當然である。

コーヘンが「唯心論を離れた社會主義は其基礎を失ひ、神を見捨てた社會主義はその屋根を失ふ」と云ふたのは千古の金言である。

科學は大なる宇宙觀を興へる。けれども科學によつて人間は謠ふことも出来なければ、愛する感情を生み出すことも出来ない。寧ろ其の反對の傾向を生ずることが多いことを悲しむのである。宗教は生存に必要な全てを含んだ價值行動である。

#### 四

斯く論ずるのは決して空論や、思想の遊戲ではない。生の實際問題である。この世智辛き世の中に、何を好んで抽象的無限や絶對を論じ、神や佛を議する必要あらん。

科學小説家のエツチ、ジー、ウエルスが「吾々には無限の

神は要らない。地球だけに廣がつて、地球だけの運命を救ふて呉れる有限の神が欲しい」と諷刺して居るが、一面の眞理を穿ち得たものである。吾人の要求して居るものは、現在の生存苦から離れたものは如何なるものでも一つも必要ではない。共存共榮の原理は靈的世界の建設に依つて、初めて完全に實現せられるものである。決して抽象的空論ではない。この高き理想を實現せんとする人々の行爲こそ

平和の根源となり、自由の基調となり、解放の淵源となるのである。斯くの如き行爲者のみに依て、社會集團が構成せられたならば、現實に生存を完全に維持することの出来得る黄金世界を形作るのではあるまいか。

#### 五

黄金世界は客觀的には伸々容易に出現し得るものでない否、永久に出現し得るものでないかも知れぬ。最も出現しない所に努力があり、向上があり、進展があるのであらう

然し主觀的には或る意味に於て、必ず黄金世界は出現し得るのである、黄金世界は自由の世界であり、解放の世界である。自由の世界は束縛の世界ではない。絶對の世界である。相對の世界ではない。憎愛を超越し、自他を氓絶し

神人を没却して凡ての我他彼此の迷悟、凡聖、貴賤、貧富の差別の觀念から脱却して、凡ての相對的觀念が一枚となつて、絶對平等の靈的聖域に任する時、眞の自由は得られるのである。

既に述べし如く、凡てを超越せる絶對の世界は無の世界である。無の世界なるが故に何もかも障害するものがないから、自由自在の活動が出来るのである。

平面に何物かあれば、それが邪魔になつて、活動する事も出来なければ、何物も建設することも出来ない。故に凡ての活動、凡ての自由は、凡てのものから超越したる無の境に達した時である。即ち自己を宇宙大に擴充した時である。宇宙即ち自己となつた時である。宇宙の外に自己なく自己の外に宇宙なき時である。

この時相對的差別的觀念の起きよう筈がない。この時眞の自由は得られて、活潑潑地の活動が出来るのである。故に宗教は凡ての活動の源泉であり、凡ての價値の根柢であるからこれを離れて人を教育し、薰陶せんとするのは泥を握つて金となさんとする類であることは、吾人の贅言を俟たずして明瞭である。



# 寫眞電送

上 島 憲 次

## 沿革の大要

繪畫や寫眞を電氣で遠方へ送らうと企てたのは可成り舊い事で、今より凡そ八十年前一八四七年英人のベークウエル氏は、金屬板上に絶縁性インクで書いた書畫に電流を通じ、受信部では電流が通ずると青色に變ずる化學紙を用ひて、其の上に書畫をあらはす試みをしたが、實用に供せられるには至らなかつた。それよりずつと後になつて今より二十餘年前一九〇七年に、獨逸のコルン氏はセルロイドの様な透明なものに畫像を拵え、之に光線を當てた。畫面の明るい所はよく光を通じ、暗い所は通じない、この光の強弱をセレンニウムに依つて電氣の變化にかへて遠方へ送る様にした。

其の後色々の人の研究により、セレンニウムは光電池に

代り、送るべき畫像は寫眞フィルムでも、焼付けた寫眞でも差支へない様になつた。實用に供せられたのは米國では一九二四年頃、紐育、クリーブランド間五二二哩の實驗に成功し、爾來紐育、シカゴ、サンフランシスコ等八都市間に寫眞電送取扱局を設けて實際に活躍した。又獨逸では一九二六年(大正十五年)シーメンス、カロールス式といふ非常に進歩した方法で成功した。

我國では大正十四年、東京大阪間にコルン式の機械で實驗したり、十五年には佛國ベラン式で有線無線で送る實驗などもして研究されたが、昭和三年に丹羽保次郎博士並に小林正次氏に依つてNE式寫眞電送機が發明せられた。

昭和三年秋行はせられた御大禮は我國の寫眞電送に長足の進歩を促した。當時各新聞社は一刻も早く御模様を報道

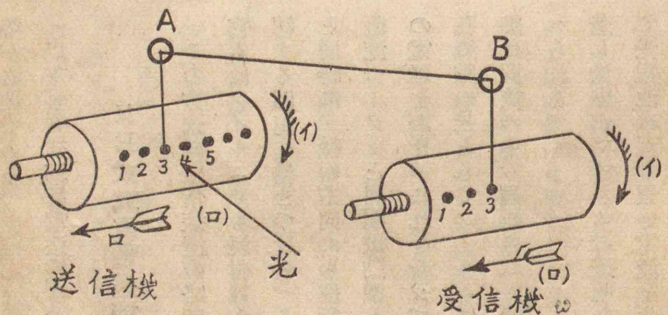
せんとして、東京大阪朝日新聞社と日本電報通信社とは、シーメンス、カロールス式寫眞電送機、大阪東京毎日新聞社はNE式寫眞電送機を用ひて競争をした。昭和三年十一月六日 聖上陛下御發輦の朝七時十二分、二重橋前に於て御大禮謹寫團が謹寫した鹵簿の御寫眞は、御召車が東京驛を發した午前八時には、最初のものは既に大阪に電送され、九時半には號外として發行されたことなどは、本邦寫眞電報史の第一頁を飾るものである。本年の九月からは東京大阪間に一般公衆用の寫眞電報の取り扱ひが始められ、甲はカビネ板で縦十八糎横二十六糎で料金は八圓、乙は縦十八糎横十三糎で料金五圓、取り扱ひの範圍は寫眞、繪畫、文字、記號、符號等で、寫眞に表はされるもの一切を取り扱ふ迄に進んだ。

## 原理

繪畫や寫眞などは多くの畫點に分解することが出来る。第一圖はイの字を大約一平方糎毎に一つの點に分解した例であるが



第一圖



第二圖

この畫點を一平方糎につき十六位にして、尙濃淡をつけたら點の感じはなく立派な寫眞が表はされる。現今の寫眞電送は先づ畫像を數多の畫點に分解し、その一つ一つを電送して、受信所ではその點を印畫紙なりフィルムなりに集めて、寫眞や種板を作るのである。畫點を送る有様は第二圖の如くである。

送信機と受信機とは同大同形の圓筒を置き、同じ速さに(イ)の矢の方向に廻轉しつゝ、(ロ)の矢の方向に進行させる。今送信圓筒に1、2、3、4と孔のある紙を貼り、別にこの孔の大きさ位の一つの光を當てる。送信圓筒が一回轉する間に一回1の孔から

光が内に入り、第二回目の廻轉で2の孔から入り順次回轉の進むにつれて3、4、5と孔から光が入る。入つた光をAに導き、茲で電氣にかへてBに送り、再び光に戻して受信圓筒へ當てる装置にして置けば、送信圓筒の1の孔から光が這入つた時には、受信圓筒に1の點に光が來、2の孔に光が這入れば同様に受信圓筒に光が來て、順次送信圓筒の孔を受信圓筒に送ることが出來、これに感光紙を置けば、寫真が得られる。これが大體の原理で、送信圓筒の孔を數多縦横に増して、畫なり寫真なりを送ることが出来る。從而寫真電送は

1 送信機では

- (イ) 寫真を數多の畫點に分解し、之れに應じた光となす装置
  - (ロ) その光を電流に變ずる装置
  - (ハ) その電流を擴大して送る装置
  - (ニ) 受信圓筒を送信圓筒と同じ速さに廻轉せしむる装置等を要し
- 2 受信機では
- (イ) 電流を光に變へる装置

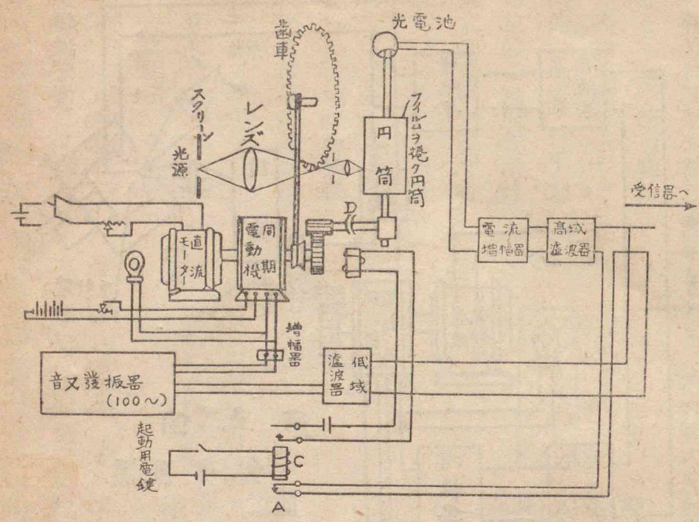
(ロ) フィルム又は印畫紙  
 (ハ) 受信圓筒を送信圓筒と同じに廻轉さす装置  
 等が必要である。  
 以下NE式寫真電送機について大要を述べる。

NE式寫真電送機

この方式の送信装置の略圖は第三圖の通りで、送るべき寫真はフィルムでも焼付けた寫真でもよい。フィルムは廻轉する圓筒に捲きつける。その圓筒は軸の周りを廻轉すると同時に、軸の方向にも進行する。圓筒を廻轉するために直流モーターと同期電動機とがある。光源には五〇ワットの電球をおき、これをレンズで進め、スクリーンの中の小孔で點の光としてフィルムに當てる。フィルムを透つた光點は圓筒の中で屈折されて光電池へ行き、こゝで電流に變へられる。

若し光點がフィルムの透明な部分に當れば、全部が透過して光電池に至り強い電流を生じ、フィルムの黒い部分に當れば殆んど透過せず、隨つて電流を生じない。尙光源からフィルムに至る途中に齒車が廻轉してゐるため、之で光が

遮斷され恰も機關銃から彈丸が發射される様に一つ一つ光點が送られます。一の光點が送られてから次の光點が送ら

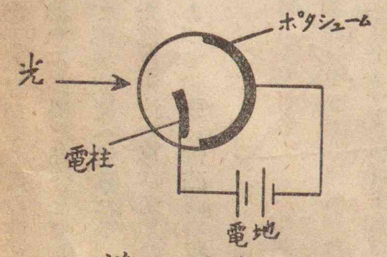


第三圖 N.E.式送信装置

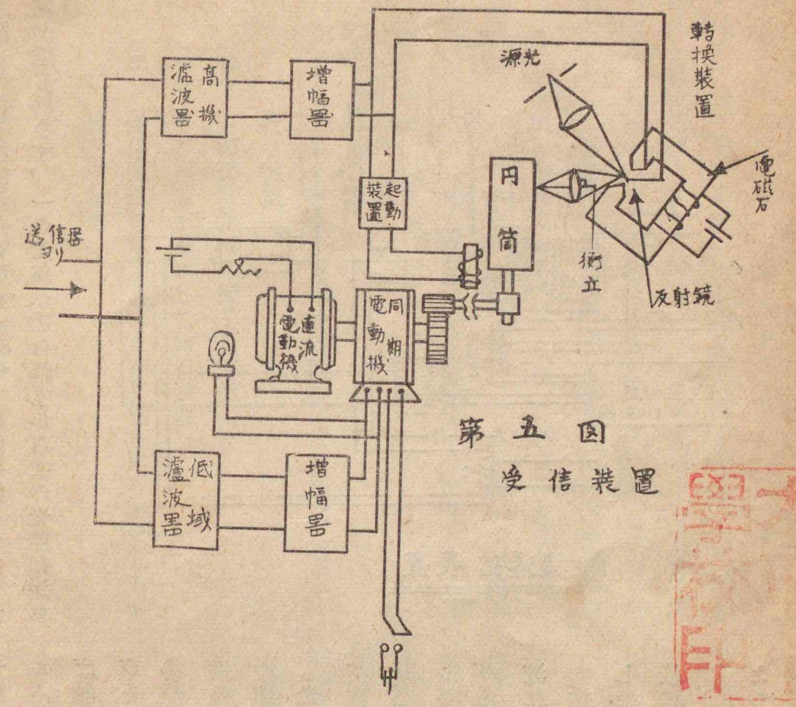
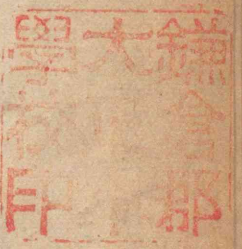
れるまでの間にフィルムの圓筒も廻轉するため、先に來た

光點のすぐ隣りを次の光點が照すやうになり、次々とフィルムの畫面を小さい光點で照して行く。圓筒が一廻轉すれば軸の方に進行して光點は次の行を照らす。かくの如く齒車と圓筒の廻轉によりフィルムの畫像を數多の光點に分ち其の點の濃淡に應じた光を光電池へ送ることになる。若し送るべき寫真が焼付けた寫真であるときには、光點を寫真の面で反射させ、それを光電池へ送る。

光電池は一つの硝子管の内面にアルカリ土金屬例へばポツタシニウムのハイドライドを塗り、別に電極を置き、硝子管内は眞空か又は特殊な瓦斯を充して置き、光がポツタシニウムの表面に當れば、その光の強さに比例して電流が流れる性質のものである。依て送信圓筒でフィルムを通過した光が之れに當れば其の濃淡の程度に比例した電流を通過し、元の電流は電流増幅器によつて擴大して受信部へ送られる。

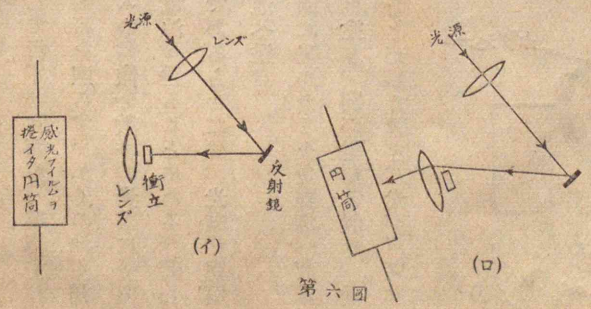


第四圖 光電池



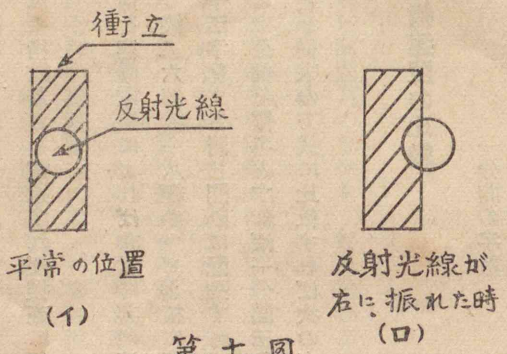
第五圖  
受信装置

受信部の構造大略は第五圖の如くで送信機から来た電流は高域濾波器で不必要な部分を取り去り、増幅器で擴大して轉換装置へ送られる。轉換装置は送られて来た寫真電流を再び光量の大いに轉換する装置であつて、強い電磁石の極の間に二本の銅線を張り、之に小さい反射鏡を取付けたもので、この銅線を通る電流の強弱に應じて反射鏡が振動する。別に光源として五〇ワツトの電燈を用ひ、レンズで光を集めて反射鏡に當ててその反射光線は再びレンズで集められて圓筒に捲かれて



第六圖

た感光フィルム又は印畫紙の上に當つてゐる。反射鏡から感光フィルムに至る途中レンズの前に衝立があつて、平常の時には反射光線を遮斷してゐる。第六圖に反射光線の通路を示し、第七圖に遮斷の有様を示す。兩圖の(イ)は平常の位置で反射光線は衝立で全部遮斷せられ、フィルムには光が達しない、送信機からの電流が轉換器に至れば反射鏡が振れて反射光線が(ロ)の様に出る。その出



第七圖

た部分だけが感光フィルムに投ぜられる。従つて送信所の畫の白い所は透過光線も大で強い電流が受信所の轉換器に至り、反射鏡を大きく傾けるため感光フィルムは多量の光が投ぜられる。かくして送信機に於て陰畫を送れば受信機

には陽畫が得られ、陽畫を送れば陰畫が得られる。受信機の感光フィルムを捲いた圓筒は、送信機の圓筒と同じ大きさで同じ速さで同じ様に運動せねばならぬことは勿論で、而かも同時に廻轉し始めねばならぬ。さもなくて送信所の畫像の左上にあつた點が受信所のフィルムの中央とか右の方とかに來れば全く畫にはならない。どうしても送信畫像の左上の點は受信フィルムの全く同じ位置に來て、少しの差異があつてもならない。かく兩圓筒を全く同じ状態に運轉するためには、送信装置に音叉發振器を置いて、これから極めて一樣な振動電流を發生し、之を送信受信兩機の同期電動機に送つて、兩方の圓筒を全く同じ速度に廻轉させ、送信機に於ける起動用電鍵を押せば、送信受信双方の圓筒が同時に廻轉を始める様にしてある。

寫真電送の應用

寫真電送が新聞に應用される事は日常目撃する所で、午前に大阪にあつた出來事は東京の夕刊には立派に掲載される。商取引上では爲替や手形を急送するとき、從來の電信爲替や電話爲替に依る代りに寫真電信によれば、直に本人



の筆跡や印鑑なども照會することが出来るので便利且安全である。尙見積書、型録、機械圖等を送るなどにも利用の途が廣い。

軍事上では飛行機の上から撮つた寫眞を直に味方に送つて作戦に利用するなどもある。

警察上では犯人の寫眞や指紋などを電送すれば捜査に便が多い。

普通の電信による通信を寫眞電送によれば非常に其の速さを増すことが出来る。縦二六糎横一八糎のカビネ板に新聞社説欄の七ポイント平活字を之と同じ間隔に配列すれば約五〇〇〇字詰められる。全部を假名とすれば一分間三〇〇〇字位は送られる。之を従來の方式に比較すれば次の表の如くなる。

### 各種方式の通信速度の比較

通信方式	一分間の字数
手送 單信	八〇
手送 二重電信	一六〇
自動 二重電信	四〇〇

和文自動二重印刷機 五四〇  
 歐文複二重印刷機 九六〇  
 寫眞電信機 三〇〇〇

以上の様に良い通信法ではあるが一般に普及するには

- 1 如何にして經濟的に運用すべきか
- 2 如何にして速度を増進すべきか
- 3 如何にして取扱を簡便にすべきか

等の問題が解決されねばならぬ。

### ……安定時代……を聴く

座敷に圓陣作つて座した五人は一樣に聴き耳立てた。戸山學校軍樂隊の奏樂に次いで、桑港放送局の紹介により、愈々濱口首相の放送である。  
 ……にロンドン海軍條約の御批准書寄託に方つて……莊重な明快な聲が力強く話しかけて来る。マイクローフホンの前に立つ首相の謹嚴な英姿が見えやうだ。顧みれば……腹から出る莊重明快の聲は益々流暢になる。昭和二年のジュネーブ會議は……握つてゐた汗ばんだ掌を開くの意識を軽く自分は覺える。放送は進んで行く——所謂冒險時代を既に經過致しまして、今や各國互に相信頼して共存共榮を圖るの安定時代に到達して居るのであります……世界約五千萬個のアンテナ幾億の人々が斯うして聴いてゐるだらうことを思ふ。日本に生ける喜びを感じ、表現と内容に一倍の修練を積んだ丁度濱口首相であることに磐石の強さを感じた——。



## 和歌鑑賞に現れたる生徒の心情

横須賀中學校 三 嶽 作 次 郎

本年度入學の一年生の和歌鑑賞の如何を、好き嫌ひによつて統計を取つて見たことがある。

教科書卷一の第五課に出てゐる石川啄木の和歌十二首を用ひた。此れ等の歌は自己反省の深さや、人生探究の奥行は缺けてゐるかも知れないが、その真情眞感を率直に、其の儘に詠つたものとして、又出來得るだけ平易な言葉を用ひたものとして、生徒がそれを鑑賞するには、何等和歌の知識の準備をも要しない點で下級生に適當なものと思つた和歌は次の十二首である。

- (一) わがこころ  
けふもひそかに泣かむとす  
友みな己が道をあゆめり
- (二) ふるさとの訛りなつかし

- (三) 停車場の人ごみの中に  
そを聴きにゆく  
遊びに出て子供かへらず  
取り出して  
走らせて見る玩具の機關車  
何事も思ふことなく  
いそがしく
- (四) 暮らせし一日を忘れじと思ふ  
不來方のお城の草に寝ころびて  
空に吸はれし  
十五の心
- (五) 東海の小島の磯の白砂に  
われ泣きぬれて  
蟹とたはむる
- (六) いのちなき砂のかなしきよ  
さら〜と  
握れば指のあひだより落つ
- (七)

- (八) 燈影なき室に我れあり  
父と母
  - (九) 寝つつ讀む本の重さに  
つかれたる  
手を休めては物を思へり
  - (一〇) たはむれに母を背負ひて  
そのあまり軽きに泣きて  
三步あゆまず
  - (一一) なつかしき  
故里にかへる思ひあり  
久し振りにて汽車に乗りしに
  - (一二) 飴賣のチャルメラ聴けば  
うしなひし  
をさなき心ひろへるごとし
- 取扱方としては、教師の方は成る可く鑑賞批評に觸れないやうにして生徒自身をして考へしめた。然る後、生徒をして次の質問に答へしめた。
- (イ) 最も好む歌一首を挙げよ
  - (ロ) 最も好まない歌一首を挙げよ
- 其の結果は次の通りであつた。

歌の番號	好む人数	その順序	好まぬ人数	その順序
(一)	六	九	七	八
(二)	一三	五	八	七
(三)	九	六	二六	二
(四)	一四	四	一五	三
(五)	二六	二	七	八
(六)	二一	三	五	一二
(七)	六	九	三三	一
(八)	八	八	一二	五
(九)	九	六	六	一一
(一〇)	二七	一	九	一
(一一)	四	一二	一三	四
(一二)	五	一一	七	六
合計	一四八		一四八	

右の( )内の數字は歌の順序を表はしたものの。此の統計から見ると、生徒の和歌への把握の傾向が見られて興味がある。

- 好む方から見ると
- (一〇) 生徒に吹込まれた孝心を詠つたものとして感銘が直接に來るから。
- (五) 年齢の相當と感傷的な心境を詠つてあるから。
- (六) 朗々たる風格と感傷とも盛つたものとして。

嫌いな方では

- (七) 生徒の心の準備と感情の幼稚とが此の歌を解せなかつた。
  - (三) 生徒は何處までも子供だ。親心への飛躍は出來ないと見える。矢張遊びに出て歸らぬ方らしい。
  - (四) 好き、嫌ひどちらも多い點に於て、考へさせる歌だと思ふ
  - 好む人数の少なかつた歌を見ると
  - (二) 交通至便な横須賀、スピード時代の生徒にはピンと來ないらしい。
  - (三) 歌の眞味が自分の力では解らない。
  - (六) (一〇) 之は流石である。
- 要するに、鑑賞とは二者——作者と自己との心の燃焼的繋りだ。自己を作者の中に見出すことだ。それ故、生徒の生活に遠いもの、意味の餘り微妙なものは自然彼等として同感を持ち得ない。此の場合、教師の補足及び指導に於て其の境地まで生徒の心情を押し上げて、矢張り(下級生故)餘所行きの様な感がして、どうもピッタリとは來ないらし

5。

自己の環境を詠つたもの、即ち生徒の生活に近いものは非常な興味を感じる。啄木の孝心が(啄木は随分親孝行であつたらしい。)直截に生徒の孝心を打つ所があつたと思ふと寧ろ愉快である。歌そのものゝ價値を道德律を以て生徒に批判せしむる可否は別として。

次に感傷的な歌に共鳴する者の多いのも注意すべきであらう。少年より青年への過渡時代にある生徒の關心の一つと思はれる。併し教師自らの安價な感傷に墮して生徒に之を強ひない限り、短歌そのものゝ性質上差支へないと思ふ。

私は茲に極く概略其の結果を考察して見たに過ぎない。もつと深い正しい生徒の鑑賞心理の解剖は、大方の諸先生の御教示を切望する次第です。最後に此の拙稿は雑誌「國語と國文學」にあつたものにヒントを得たことを附加して置く。

(五・一〇・七)

# K子の母と語る

中郡・平塚第三校 高梨 幹雄

「今日は……」

「よういらつしやいました、昨日K子が歸りまして近い中に先生がいらつしやいますよと言つてゐましたので、心待ちにお待ちしてゐました。」

「さやうですか……お忙しい所を御邪魔致します。お宅には始めて上りましたが、私の學校では昨年以來家庭訪問をいたしてゐます……そして子供の教育について家庭と學校と連絡をとりたいと存じます。」

「それは誠に御苦勞さまで御座いますK子はあの通りの我儘者でございますから先生にも定めし御骨の折れる事と存じます。こちらこそ時折學校に御伺

ひ致して授業も拜見し色々参考に

ます事柄をお聞きしたいと存じてゐますが、只今女中が歸つて居りまして心に思ひつゝも遂々失禮いたしましたまひました……どうぞ先生そこは冷えます……どうぞこちらへ。」

「いやもう此處で結構でございます。ほんの十分ばかり御邪魔させていたゞくのですから……」

「それでもあまり失禮ですもの……」  
「いやもう此處で上等です……K子さんは」

「K子は只今姉とおふろにまいりました……先生ごめん下さい。どうぞ之をおあて下さい。」

「では失禮します。なんぞK子さんの事について御話しは……」

「はい……あの通りのものですが學校の方はいかがですか……成績の方は……」

「成績の方は實に申分ございません。殊に算術は御得意で、級中一？二？ですね。」

「そうですか、全く先生の御盡力によりまして……先生御行儀はいかゞでせう。いつもK子にそう申してゐます——いくら學問はよく出来ましても人格が劣等であつては駄目です。學問は人格を向上させるためにするのです。先生K子の御行儀についてお考へになることは……」

「前の學校ではK子さんのしつ、けについてお話しありませんでしたか」  
「左様です以前の學校の先生はあなた

の様にお若い方でした。それに宅も學校のすぐ前でしたから先生もよく見えました。その時いつもK子は内氣だ、はにかみ家で困る——他の學級の先生方が研究授業の後などで『K子はぐづぐづしてゐるね。K子よりも二三番下の者の方が遙に成績がよいやうだなど言はれる。けれど試験をするとK子さんの方が出来る』などとおつしやいました。」

「ほんとうに内氣な者は損ですね。實力は持つてゐながらみす／＼發揮出来ないのですから——。私もK子さんを最初、みそ、こないました。何を聞いてもぐづ／＼してゐられるからね。だが一日一日と立つて従つてK子さんの眞價が分つて來ました。けれどもなほ矯正を要しますね、おうちでは……」  
「いえ……なにせよ主人も私も子供の

教育については無知識でございます。それと申す矯正方法もございせんが、私はあのやうな内氣ものですから大勢の方の前に出すやうにしたいと存じます——それですから、時折いらつしやるお客さまなどにお茶やお菓子を下させます。がお出しといふともう眞赤になつて下をむき、はてはないてしまふ様な仕末です。」

「それはよい所にお氣づきになりました。いやがる時に強制してさせるのは考へものですが、心やすい方などとお話をさせたり、おあしらひをさせたりするのはよい強制方法の一つだと存じます。學校でもこんな事がありました。算術の問題の説明を教壇に立つてして戴きました。私は前日K子さんに説明して戴く事を豫約して置き、其の翌日算術の時間再びK子さんにうまくやつ

て下さいと激勵してやりました。K子さんは解答を板書し言語で説明なされたが中々うまく行きました。——いく分はおどおどした態度はありましたがこの時私はもう矯正の結果の第一歩を握つたやうに嬉しうございました。」

「お話を一々承りますと有難くてたまりません。先生そう申しては失禮ですがK子の子もだん／＼と變つて行く様です。以前は學校からもどりましても部屋の隅に入り込んで雑誌などばかり讀んでゐました。身體によくないと存じて外遊をすゝめても動かうとせず少し注意すると泣くといつた様なことが度々ありました。——それを近頃は隣のM子さんや、十八軒町のF子さんなどともよいちよい外に出て行くやうになりました。活潑なM子さんやF子さんのやうなお友達の出來ましたの

「はい、仕合です。先生粗茶を一つお上り下さつては」

「有りがたう。お友達のよいのを持つのはほんとうによいものです。全く子供の頭は白紙のやうでどうでもなりませうからぬ。」

「お友達といひますと先生随分この頃の生徒は徒競走が達者ですね、きりつとした體操服をつけて走つてゐる姿を見ると涙が滲れますよ。……先生K子も少しは走りますか。」

「K子さんも走られますとも、昨日選手になられました。やはり始めは一寸厭はれましたがね、一番弱い組分に入つて走らせて優勝されたから趣味がつかれたやうです。自信は力だと申しませんが、自己の力がわかると趣味も生れるものです。K子さんもこの方面から内氣がいく分とも直ればよいと思ひま

す……あゝ随分長くお話ししてしまひました。」

「いえもう細い所まで御注意下さいましてK子も明るい方に歩んで行く事が出来ます。」

「お忙しい所へ上りまして失禮致しました。どうぞK子さんについて御注意下さる事がございましたらばいつでも御話し下さい……さよなら。」

「もうお歸りでございますか……ほんとうに失禮ばかり……」

「どうぞ御主人によろしく……」

(前任地平塚第一校にありし日の手記)

### 大學の勅語奉讀式

——此の勅語が演發せられて後、四日目の十一月三日の天長節に、東京帝國大學では、工科大學の中庭に總長加藤弘之さん以下教職員學生が一同集會して、勅語奉讀の

式を擧げた。これが多分學校に於ての勅語奉讀式の最も早いものであつたらうと思ふ。其時の式は先づ總長の加藤さんから今回教育に關する勅語を御下賜になつた。就ては茲に奉讀式を舉行する、諸子は謹んで拜聴せよ。との挨拶があり、書記官が大聲に奉讀を致し、次いで、天皇陛下の萬歳を唱へ、總長から一場の訓示があり、又文科大學の重野安釋教授が一場の演説をなされた。いづれも皆頗る意味の深いものであつた。

その式の終りに學生の奉答文の朗讀があつた。それは實に堂々たるものであつて、その文章の終りに、『願はくは聖旨を服膺して拳々失ふ事なく、此に顛沛し、生死之と俱にし、以て聖朝の臣たるに背く事なく、以て神州の民たるに背くことなからん。』と結んで居る。當時の大學の學生の意氣も之れでよくわかるのである。

(明治天皇と教育勅語、三上博士述抄)

## 父はその子に斯くした

横濱・浦島校

相原武夫

犯人の罪狀を取調べるのに、彼が精神の平衡を、全く偏倚錯裂の状態に置かねばならなかつた動機に同情して、激情から平靜にと引戻してやる必要が必要だと言はれてゐる。彼は嘗て他人から受けたことのなかつた至深の同情の前に、頑迷な利己心や、あつかましい自己主張が忽ち轉迷悔悟以て善良な方向への革心となることが尠くないのである。

翻然として悟る！それは決して外からの不自然な手段や悪辣な懲罰ではない。人間と人間とを結び付けてゐる仁愛的要素を通して即ち親切慈愛の精神を以て肉迫したからである。いよゝゝ

荒んだ氣分で接する時、彼の思想は反撥して益々激昂し楯ついてくるのである。彼の性格に峻嚴なる制裁を加へることなく、一切を寛容する憐愍同情的態度をとることが極めて必要である。

色々な悪い習慣や、子供の持つ欠陥などを矯正する場合に、現在悪行の行はれたその瞬間に、直ちにそれを取つて押へて教育上の處置を施すやうなへまなことをやれば、生徒は必ず自分の面目がまるつぶれになつたやうな逆上の感情が昂進されて、決して彼を平靜裡に導くことは出来ない。

どこまでも現存してゐる積極的の性質を手がかりとして悪い性向を矯めね

ばならぬ。

訓誡を與へる最良の機會は、或悪行が現に犯されたその瞬間ではなくて、今までいつも不正行為が繰返されてゐたのに、珍しくも只一度正しく行はれたその瞬間である。いつも彼を平靜に引戻し或はこちらの温情によつて一も二もなく彼を擒にすることではなければならぬ。それは教師の純粹な態度と平靜な吾とが必要である。

感化とは人格と人格との關係である意志と意志との交渉である。教師の豊富な鮮明な個性によつてのみ彼等を正しく導くことが出来るのである。教師の斷えざる修養、理想の渴仰、それを眞に彼等を濟度することが出来るのである。上求菩提で化衆生とは寔に意味深い言葉である。

十月四日子供から次の綴方が發表さ

れた。尋五男、僕の妹の千枝子は今年七ツだ、けれども仲々かぬ氣で、朝は一番早く起きて、一人で自分のふとんをたゝまねば氣がすまない。そればかりでなく、よく臺所のお手傳ひをするし、姉さんのするのをおしひけても自分がしたいといふやうな氣性です。

其の妹について此間面白い話があります。それは僕達が學校へ行つてゐる留守にどこからか鉛筆を持出して、千枝子が壁に畫をかけたのです。それをお父さんが會社からお歸りになつて、「だれがこんな所へ畫をかけたのか。」と、皆を集めてお尋ねになりました。姉さんも、兄さんも、僕も、弟も皆知らないことです。おたがひにだまつて顔を見合せてゐました。千枝子もすました顔をしてゐました。

お父さんは「千枝ちゃんだらう。」と

お尋ねになると「知らない！」ときつぱり答へました。「それでは徹ちゃんか？」と弟にお尋ねになりますと、「僕知りませんよ。」と弟もきつぱり答へました。「それでは誰でもないんだね、この畫はなか／＼上手にかけてゐる。この畫をかけた人にお菓子をおあげやう、お姉さんだな。」とお父さんが眞面目におつしやると、お姉さんはお父さんのおつしやると、「はア私」と申しました。氣を知つて「はお姉さんにお菓子を上げませう、とおつしやると、急に千枝子が「お姉さんじゃないよ、千枝子だよ」と言ひだしました。お父さんはじめ僕は思はずふき出しました。「子供は罪がないなア」お父さんは笑ひながらお土産の風月堂のお菓子を皆に下さいました。

お茶をのみながら、お父さんは「千

枝ちゃん今度から悪いことでも自分でしたことはしましたと正直にいふのですよと申されました。千枝子は「はい」と元氣よく答へました。それから千枝子は「そを言はなくなりました。しかしかかない氣は今でもまだなほりません。お父さんや、お母さんは面白い子だと言つて千枝ちゃんをかはいがつて居られます。(終)

千枝ちゃんのお父さんは、その子を如何に教育したのでせう。子供にとつて最重要な正直といふ意味が、彼女に如何に體驗されたではないか。疊の上の水練式訓練でなかつた正直の徳は、この子供をして生涯を支配するまでに強く體認されたのである。

凡そ惡癖の矯正善良な生活への訓練とはかかるものではなからうか。

### 微笑さへ浮べてゐる

武山校 田川定一

K——それは彼を知る全部の先生がきつと一様に考へてゐた様に、私も決して好感を以て彼に接することが出来なかつた。彼は確かに頭のよい兒であつた。然し彼の放縱と粗暴とは、あまりにもそれを差引くに十分であつた

彼は家庭的には寧ろ恵まれてゐる方であつたが、どうしたものか、常に人の上目で見える様な癖を持つてゐた。そして又ガツチリした血色のよい、何だか一癖ありさうな無口な容貌は、彼に對する直觀を一層傷けた。

私は元來、自分の學級の兒童は兎も角——敢て努め様ともしないが——他の學級の兒童の姓名を記憶することに非常に困難を感じてゐた。覺えたにしても、名と顔とが別々であつた。然し

それが——尋六のK——彼だけは粗暴の名によつて、最も速く私の記憶となつてしまつたのだから驚く。

彼は人並に行動することが出来なかつた。常に裏へ／＼と行かうとしてゐる様であつた。無口の者に見る落着きは無く、注意も極めて散漫で、何か惡戯でもはじまつたといふと、きつと彼が仲間には入つてゐないことは無かつた。廊下をわざとバタ／＼駈け廻つたり、女生をいぢめたり、他の組が體操の時整列してゐる中を、外から來てツツタ切る位の事は、あまり悪いことゝも思つてゐなかつた。彼は又喧嘩にも相當自信があつた。或る時など、自分より一級上のSと、些細なことから喧嘩をして脚を折られ、先生を家庭にお

百度詣りさせたこともあつた。かうして彼は力のあるにまかせて暴れた。従つて彼の學力についても、決して頭がよいといはれる程伸びることが出来なかつた。彼は常に學力では同級のNやYやH等に壓へつけられてゐた。

かうしてゐる中に、彼は一先づ尋常科を卒業することになつた。NやYは中學校へ入學した。

高一となつた彼、而して自分はその受持となつたのである。

四月一日——私の學校ではこの日級長の選舉をすることになつてゐる——私は受持としての訓話をすると共に、正副級長の選舉に當つて、極めて月並のことではあるが、その心得について話した。私は第一に身體が丈夫で欠席の少い人、第二に學級を愛することの出来る人、級友に同情を持ち得る人、第三に成績が相當によい人、といふ標準を示した。而して其の結果はHとK

が當選した。私はそれまで、Kがそれ程級友の間に信用があるものと考へられなかつたのである。私は私の學級經營上、高學年兒童には積極的自律活動を強調してゐた關係から、果して彼が其の中心人物として、期待に合し得るかを疑ひ且つ危ぶんだのである。然し遂に私は——何とか物にして見やう——といふ決心の下に彼を副級長として任命したのである。そして其の時直ぐH及彼と級友との關係、各自の考ふべき責任と努力點とについて話した。かくて私は彼に對する注意の火蓋を切つたのである。

私は彼に出来るだけ多くの仕事を云ひつけた。そしてその事には必ず責任を持たせた。それには彼も少からず弱つてゐた様だ。彼は初め確かに私を恐れたらしい。氣のきかぬこと、失敗、それは常に彼の仕事の影であつた。然し私は非常な努力を以てそれをとがめ

ることを敢て憚らなかつた。よい事は少しでも皆の前で眞剣にほめてやつた。

又私は常に——Kに對してばかりでないが——他人の迷惑にならぬ限り、彼等の自由を寧ろ極度に認めてやつた少し位の亂暴も、それが個人主義的な考や、卑怯な考からでない限り大目に見てやつた。然し若し彼等に之を裏切る様な行があつた時は、斷然その人——社會人——たるの故を以て反省を促した。然し其の場合、決して彼を級友の前で辱しめる様なことはしなかつたこのことは確かに彼の短所を矯める上に、相當の効果を齎した。

彼は其の後何かにつけ、餘程考へて來る様になつた。そしてそれは仕事の上に最も多くあらはれた。遂に彼は全力を擧げて彼の責任に向つて涙ぐましくまでに躍進してくれる様になつた。私は彼が當番の後始末や、級友がやりつばなして歸つたあとの手工室の整理

の爲、初夏の日の長きに夕暮まで、コソツと仕事をしてゐたり。たつた一人で教室に残つて、復習や豫習に餘念のない彼を見出した時、私は何うしてあんな手に負へなかつた兒が、こんなになつたかを怪しみ、且つ敬虔の念に打たれたのである。

近頃の彼は最早消極より積極に善に向つて精進しやうとしてゐる。矢張り——「兒童は成長そのもの」——である。若し私達が兒童を瞬間的に眺め、利那的に速断し、徒に彼等の過去の凡てを問ひ、偏見を以て臨み、かりにも叱責のみを以て訓練の方法と考へるならば、これこそ最も醜き罪惡であらねばならぬ。兒童は決して私達の氣まぐれによつて左右される程、お目出度いものではない。

第二學期、Kは正級長に選舉された。近頃の彼の顔には微笑さへ浮べてゐる作業——これこそほんとうに兒童を救ひ兒童を伸ばしめる唯一の手段である



### 源頼朝舉兵七百五十年に際して

## 石橋山古戰場に往年を偲ぶ

### 石橋山古戰場展望臺と關白道

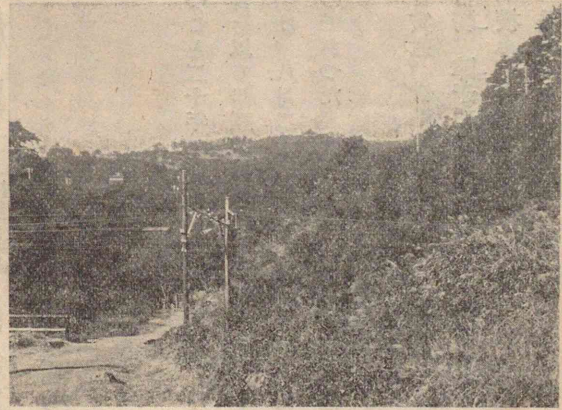
石 野 瑛

伊豆の謫所に靜かに時機の至るを待つこと二十年、遂に治承四年八月十七日、三島社の神事の日を以て伊豆の目代山木判官平兼隆を血祭りにあげた源頼朝は、八月二十三日寅剋、我が相模國石橋山に兵を擧げたのであつた。即ち先づ吾妻鏡を開いて往年を回想したい。

廿三日癸卯。陰。入夜甚雨如沃。今日寅剋。武衛相率北條殿父子。盛長。茂光。實平以下三百騎。陣于相模國石橋山。給。此間以件令旨。被付御旗横上。中四郎惟重持之。父頼隆付白幣於上箭。候御後。爰同國住人大庭三郎景親。侯野五郎景久。河村三郎義秀。澁谷庄司重國。糟屋權守盛久。海老名源三季貞。曾我太郎助信。瀧口三郎經俊。毛利太郎景行。長尾新五爲宗。同新六定景。原

三郎景房、同四郎義行。并熊谷二郎直實以下。平家被官之輩。率三千餘騎精兵。同在石橋山邊。兩陣之際。隔一谷也。景親士率之中。飯田五郎家義。依奉通志於武衛。雖擬馳參。景親從軍別道路之間。不意在被陣。亦伊東二郎祐親法師。率三百餘騎。宿于武衛之後山兮。欲奉襲之三浦輩者。依及曉天。宿丸子河邊。遣郎從等。燒失景親之黨類家屋。其煙聳半天。景親等遙見之。知三浦輩所爲之由訖。相議云。今日已雖臨黃昏。可遂合戰。期明日者三浦衆馳加。定難喪敗歟之由。群議事訖。數千強兵。襲攻武衛之陣。而計源家從兵。雖比被大軍。皆依重舊好。只乞効死。然間。佐那田與一義忠。并武藤三郎。及郎從豐三家康等殞命。景親彌乘勝。至曉天。武衛令逃于楢山

之中給。干時風惱心。暴雨勞耳。景親奉追之。發矢石之處。家義乍相交。景親陣中。爲奉遁武衛。引分我衆六騎。戰于景親以此隙。令入相山給云々。文、簡であるが合戦の狀眞に心境に迫るの感がある。



石橋山古戰場

た。其の朝横濱驛に集まつたのは佐藤校長、山田氏、一中の松野重太郎氏と自分とであつた。小田原で降りて早川村を経て、佐奈田靈社前で勢揃ひをしたのは午前十時近くであつた。即ち此の地片浦村の原助役

同小學校の杉山校長及び同村駐在所の千田氏、眞鶴小學校の平田校長、根本氏、福浦小學校の小野口、二見兩氏、湯ヶ原の海原氏、東京日々新聞記者山縣氏及び山案内二人、それに前記の四人を加へて總勢十五人である。一行は前記の吾妻鏡などによつて兩軍の陣地を按じ、佐奈田與一俣野五郎の組討ち場、ねぢり畑などを眺めて、白兵戦の有様を想見し、それより愈々頼朝の足跡を辿つて前進することゝなつた。

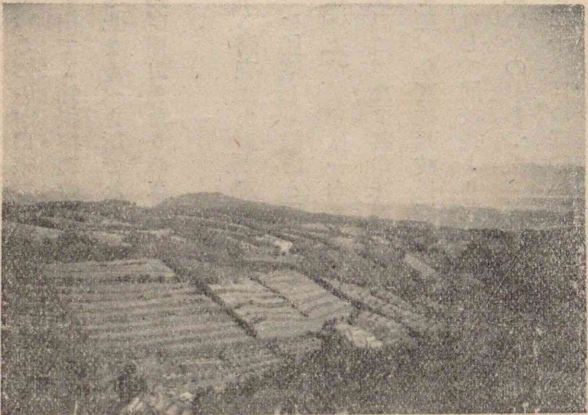
今昭和五年は治承四年より滿七百五十年。そして旗揚の八月二十三日は今の曆の九月二十一日に當るといふ。恰も我が縣が縣民の意氣を振作する爲に編纂刊行せらるゝ縣民讀本には「郷土の偉人」の條中、源頼朝を英雄中の英雄として眞先きに掲げられ、また今夏八月佐藤善治郎先生は安田善衛、矢吹活禪二氏と共に臨地踏査を敢行せられ、縣都市計畫課の方よりも話があつたので、遊心大に動いたのであつた。偶々十月五日に石橋山一帶の踏査をするといふことを縣の山田寅元氏から報ぜられたので、私は喜んで之れに加はつたのであつ

最初から道もない蜜柑畑の中を這ひ上り、やうやく聖嶽への杣道へ出て進むこと數町、此の日天氣朗らかにして氣澄み、脚下には石垣山を隔てゝ小田原が手に取るが如く、

大閤豊臣の攻戦が眼前に髣髴たるものがある。それより湘南一帶の長汀曲浦、江の島の青螺、みな一眸に聚まり氣宇潤達。登つて聖嶽の杣道の盡くるところ、左手に穴兀として聳ゆること六六九米、これ大會根。

俗に猿轉ばしと呼ばれ、頼朝は伊豆より來つて先づ此の山頂に旗を翻したと言はれ、旗揚山とも唱へられて居る。其の旗揚山の眞下に丸塚といふ塚があり、少し離れてちやう塚と名づけられて居る塚があるが、これは何時の頃のものが調査を他日に残した。

さてこれよりは全く道がない。頼朝が逃げたと考へられる所を、篠竹や、薄茅を押し分け、荆棘草莽の中を掻き分けて、互に連絡を取りつゝ、ひた登りにのぼり、標高八三八米の聖嶽の山頂に至り、篠竹の中から頭を出して、往年の戦況を想見するのであつた。それより聖嶽を裏に下つて米神川の上流なる



石橋山より石垣山を隔てゝ小田原原望む

谷川に出て、一行は互に顔を見合せて一息、再び荆棘雜草の茂みに踏み込んでひたぶるに進み、彼の大正十二年九月一日根府川を襲つた山津波の發源地點を左に見て星ヶ山に來た。

吾妻鏡の二十四日の條を見ると頼朝は相山内堀口の邊に陣したが、大庭三郎景親は三千餘騎を率ゐて更に追撃して來たので、頼朝の兵は極力之れを禦ぎ、頼朝自らも百發百中の藝を振つたが、矢も既に悉きんとしたので、加藤景廉は御駕の轡を取つて深山へと引いたのであつたが、景親等の群兵が四五段の間に迫つたので、高綱、遠景、景廉等更に防戦し次で彼等は武衛を尋ねて數町險阻の山を攀登した所、頼朝は臥木の上に居られ、實平が其の傍に候して居た。これより人目を避ける爲遂に涙ながらにそれ／＼分散することゝなつたのであつた。そこで北條時政等は箱根の湯坂を経て甲斐國に向ひ

北條宗時や工藤介茂光は桑原より平井郷を經、早川の邊に出た所、伊東祐親の軍兵の爲に圍まれて宗時は討たれ、茂光は自殺したのであつた。景親は頼朝を討たんとしてあまねく嶺や溪を捜し索めたが、遂に發見することが出来なかつたのであつた。かくて頼朝は栢山を出で、箱根權現の行實の宿坊に一夜を明かしたが、此處も止まるべき所でないから、二十五日早朝行實坊を出て、再び栢山あたりの草味の中を眞鶴に逃れたのであつた。

そこで我々一行は此の日箱根方面に至る踏査は止めて、頼朝が九死に一生を得た栢山あたり一帯を展望し（栢山と稱する地は昔は杉樹が鬱蒼として居たといふが、今は一本を存せず大正六年に所謂土肥の大杉が倒れて、たゞ其の株根を存するのみ）星ヶ山より彈正ヶ原を經、今夏佐藤校長等が踏査せられた小道地藏堂址を見た。そして同校長より此の堂址發見に就いての興味ある話を聞いたのであつた。吾妻鏡には二十五日朝箱根行實坊を出て二十八日に眞鶴から安房に向つて舟出した頼朝は、二十六、二十七の兩日を如何に過したかを記して無いが、源平盛衰記には小道地藏堂に隠れたことを面白く書いてある。その地藏堂址と考ふべ

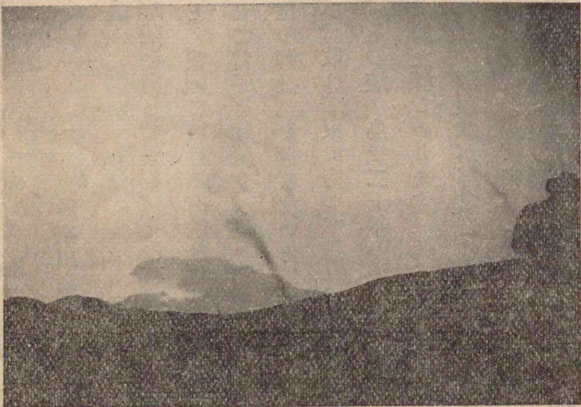
きものが頼朝が箱根を出て眞鶴に来るのに、どうしても通らねばならぬ地點に存在し、此の地を里人によつて寺屋敷と呼ばれ、二百年計り前まで其處に堂があつたのを、今の吉濱村に移したのであるといふから、當年頼朝は此の堂に隠れたと考へて少しも無理はない。今はたゞ叢中數個の礎石を見る計りである。私共一行は全く頼朝石橋山合戰當時の心持になつて、猪も通らないとさへ言はるゝが、藪の中を遮二無二に歩き廻つて眞鶴へ着いたのが、黄昏の頃であつた。折から來合はされた松本眞鶴町長に挨拶を交はして、こゝで解散したのであつた。

想ふに此の日の踏査は前にも述べた様に晴明な好天氣で何を言つても晝間のことである。これが四隣暗曠たる夜陰で、しかも疾風豪雨の中の生死の境を行く戰鬪とあつては其の困難は想像の外である。然し頼朝をして覇業を成さしめたのは此の險峻な地形地貌、嶺溪を蔽ふ鬱然たる荆棘草莽といふ様な自然の利と、誠意を以て頼朝を助けんとする人々の和があつたからで、峻峰險谷に配するに、土地者で地理に明るい土肥實平等が赤誠を以て頼朝を導いたからである。果して然らば天稟の英雄の資は我が相模南部の此の

地形、此の人々と相俟つて國史上に大なる意義を有するもので、若し其の一を缺かんか、鎌倉時代以後の國史は模様變へとなつてたであらう。

此の踏査が行はれた次の日曜日即ち十二日には此の古戦場の地なる片浦小學校を會場として頼朝石橋山旗揚七百五十年記念祭が舉行された。箱根神社宮司及び伊豆山神社宮司によつて嚴かに祭式が執行せられ、山縣知事の祝辭、主催地を代表して原片浦村助役の答辭があり、次に大森金五郎、佐藤善治郎兩先生の講演があり、また松本眞鶴町長も感想を述べた。

此の日の案内状に頼朝に關する史料を有する者は持參せよとあつたが鹽原加久吉氏の藏する頼朝自筆の文書は、大義名分上より頼朝を論ずる時に非常に有利なるものであるが、其内容は同氏自身の發表であるまで遠慮する。此の記念祭に片浦

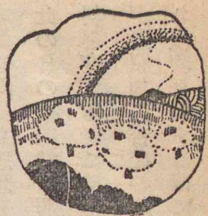


小道地藏堂址より眞鶴を望む

村に於ては、村當局を始め青年團、處女會等村民が擧げて來會者を何くれと歡待し、折詰、眞田うどん、旗揚餅、ゆで烏賊、芋の串さし、蜜柑、柿、栗、其の他飲料など山のもの、畑のもの、海のものなど心をこめた手料理で饗應されたことは、衷心から感謝に禁えない次第である。

以上頼朝擧兵七百五十年に際し、十月廿五日の石橋山古戦場の踏査と同十二日の旗揚記念祭の有様とを記して、一は感謝の意を表し、一には後日の思出の料としたい。尙本稿を終るにあたり山縣知事の祝辭にも史蹟の保存上、また顯彰上に意を注ぐべきことを示されて居るが、私は此の地頼朝關係の施設としては、石橋山古戦場展望臺を設け、大閣豊臣氏關白道と石垣山に構築を施され、大關係の史蹟としては、關白道と石垣山に構築を施され、大箱根をして愈々内外人の懐古、探勝の名區たらしめられたことを切望して已まないものである。（昭和五・一〇・一三）





## 石橋山戦争の地理

神奈川高等女學校長 佐藤善治郎

四二

源頼朝の事業は、我國史に於て一大時期を劃して居る。その事業の着手即ち旗揚が、この石橋山を中心として僅々數里の間に起つたといふ事を考へて見ると、我國に於ける有數な史蹟の地であると謂はねばなりません。歲月は七百五十年を経て居りますが、山川草木依然として當年を物語り、事々物々が活躍して居る様に思はれます。私はその歴史中の主として地理に關する意見を述べて各位の御批判を仰ぎたいと思ひます。

源頼朝は十三歳の暮に平治の亂に遇ひ、敗れて東に向つて遁れ、美濃で捕はれて伊豆に流されたのが十四歳の春であります。監督は北條時政、伊東祐親で、その蛭ヶ島で二十年の歲月を過ごしたのであります。しかし罪人の様な取扱を受けないうで、割合に寛大な取扱を受けて居た様であります。此二十年は平家の全盛時代でありましたが、次第に人心が平家を離れて、治承四年五月二十七日には、源頼政が高倉宮の令旨を奉じて兵を擧げ、宇治で敗死する事になります。頼朝はその前既に高倉宮から「兵を擧げて平氏を滅ぼす爲に戦へ」といふ令旨を受けて居ります。それから六月二十七日になると、三浦義澄、千葉胤頼が京都の兵亂を見て、歸途に頼朝を尋ねて閑談します。頼政征討軍に従つた大庭景親など、頼朝の擧動の危険である事を京都で公言して居る有様でありますから、源家の嫡流である頼朝の身邊は漸く危くなつたのであります。

當時の大勢を見ますと、關東の諸豪族は、頼朝の祖先頼義、義家に従つて、東夷を征討して身を立て家を起こした者の

子孫でありますから、頼朝の事業は關東平野に向つて開かなければなりません。身方として明瞭なのは伊豆北條の北條時政、修善寺驛附近に居た狩野茂光、湯河原の土肥實平、中郡の岡崎義實、高座郡茅ヶ崎の大庭景義、三浦の三浦義明下總の千葉常胤などでありましたが、敵對するは藤澤の大庭景親、鎌倉郡の俣野景久、伊東の伊東祐親を始めとして亦多い。しかしこれ等の豪族は所謂關東八平氏の流れで、血縁の連なる者でありますから、向背はハツキリと解らぬのであります。大體今の政黨の様なもので、善惡の區別をつけるのはむづかしい。源家の舊恩を思ふ者は頼朝につき、現在平氏に重用せられて居る者は頼朝に反對するといふ有様であります。頼朝としては早く關東に呼號するのが得策と思つたので、今で言へば議員候補者として早く名乗りを揚げる事が大事であると同じであります。

頼朝は八月十七日三島神社の祭日に兵を擧げたのであります。此日の朝事務長として早くから仕へた安達盛長が弊物を三島神社に献げます。そして其夜山木判官兼隆を襲つて殺しました。兼隆は頼朝の正面の敵ではなかつたのであります。すが、清盛の一族で、茲に左遷せられ、清盛の威を恃んで近郷に威を振つたので、之を血祭にしたといふのであります。それから頼朝は關東平野に出るのにどの道を求めたかといふと、伊豆山神社を通つて、湯河原の土肥實平の處に出たのであります。伊豆山神社は鎌倉時代には伊豆箱根の權現といふ様に並べられ、伊勢の内外の神といふ様に貴ばれたのであります。この兩神社は頼朝の時代に既に立派な神社で、社會上に於ても相當に力を有つて居たのであります。擧兵の前七月五日に伊豆山の別當文陽房覺淵が、頼朝を尋ねて大にその決心を促した事がある。そして山木判官を殺した翌々日十九日に御臺所政子は先發して文陽房に入つて居る。そして二十日には頼朝自ら伊豆相模の兵を率ゐて伊豆を出て土肥郷に赴いて居る。此の政子と頼朝の通られた道は何處であるかと言へば、伊豆の蛭ヶ島、平井から輕井澤峠を越え熱海町の方へ下らないで、日金峠の下から、直ちに伊豆山權現に入つたものと思ふ。それは伊豆相模の武士が、土肥北條の間を往來するに伊豆山を通路とし、暴行を働いて神聖の地域を汚すから、取締つて貰ひたいといふ事を頼朝に願出ると、頼朝は何時も之を快諾して禁制した事實がある。

四三



二十日頼朝が土肥郷に入ったといふのは、土肥實平の館に入ったに相違ないとして、二十一日、二十二日の兩日に頼朝は何處まで進んだか不明であるが、二十三日には石橋山に居られた。もつと進んで早川まで出ようとしたが、早川黨の者が、早川では裏山が浅い。即ち小田原から湯本街道にかけての平原から後を脅かされる事を畏れたので、少し退いて此の石橋山の谿谷に相當の防禦工事を施して、戦争の用意をしたのであらうと思ひます。此の日は曇りて夜になると大雨沃ぐが如しと書いてある。敵の陣を記すと大庭景親は兵三千騎を以て一山を隔てて軍すとあるから、まさしく早川の上の石垣山であると思ひます。伊東祐親は三百騎で後山に陣すとあるから此先の米神山である事が解ります。而して頼朝の軍三百騎であるから甚だ心細い事であつた。多少の防禦を構て、旗の先に高倉王の令旨を結び付けて軍容を整へたのであります。大庭景親の軍では川崎の稻毛重成は明朝開戦するのがよからうと申しましたが、景親は三浦の兵が酒匂川に迫り、洪水の爲に渡る事が出来ないで、景親の身方の者の家に放火して居るのがよく見えるので、明日になると挾撃せられる心配があるので、既に黄昏に近づくに拘はらず進撃して茲に大接戦が開かれたのであります。岡崎義實の子佐那田餘一義忠は、二十五歳の若侍でありましたが、俣野五郎景久と此の門前のねぢり畑で引組んで長尾定景の爲に殺されると、従僕の文三家安は躍出して稻毛重成の軍に斬入つて戦死しました。此の二人の社が此の谷の兩側にあり其他戦死した者は武藤三郎などを始として幾人であつたかその人数は不明であるが、敗れて逃れると、景親は勝に乗じて追撃曉天に及ぶと書いてある。そして吾妻鏡には頼朝の難義した事を「疾風心を惱まし、暴雨身を勞す」と形容して書いてある。

頼朝の身方になんか人が居たかといふと、北條時政、長子宗時、次子義時、狩野茂光（これは二十餘年前爲朝を大島で政殺した人）、子親光、土肥實平、子遠平、岡崎義實、安達盛長、天野遠景、佐々木定綱、經高、盛綱、高綱の四人の兄弟、山木判官を斬つた加藤景廉等で、殊に面白いのは大庭景親の兄大庭景義、これは高座郡茅ヶ崎の豪族で、此の年の七月中に安達盛長が尋ねて來加を説かれると返事を保留し、八月二日弟大庭景親が京都から歸つて來たので相談する

と各主張が違ふので両方に分れ、景義は頼朝の軍に加はつて居る。斯る有様であるから敵味方の分れ方は僅かの事で、深い因縁のないが多い。梶原景時を始めとして向背の忽ち變ずるのは斯る事情からであつたのである。

頼朝の逃走の道を索めんとして、一週間前の日曜日十月五日に沿村有力者、小學校長、警官、新聞記者の方々十四名と、朝早く石橋山を出發して山に登つて行くと、道が段々險阻になつて、遂に標高二千七百尺の聖ヶ嶽の頂上に登つた此の道は何時切つたか知れぬ笹が生ひ茂つて、漸くの事で進む事が出来るが、その側面はとも攀ぢ登る事の出来ぬ傾斜で、そして伊東祐親の三百騎が後山に控へて居るから、海岸又は根府川の溪谷は通らなかつたものと思はれる。それからあまり標高の違はぬ處即ち鞍部を通つて同標高の星ヶ山に登ると、その東南八合目といふ處に近頃有名になつた小道地藏堂の跡に出るのでありますが、茲はあまりに海岸に向つて突出した見晴らしのよい處で、海濱方面に伊東祐親の兵の居るのに此方角を指したとは思はれない。これは一旦箱根に逃げて、それから眞鶴崎から通れる間に逃げこんだ思はれる。それは後に語に事にする。

頼朝は聖ヶ嶽から右の鞍部に出で、之を越えると、脚下に鍛冶屋川の上流の大谿谷が見える。吾妻鏡には頼朝は石橋山で敗れて、梶山の中に逃れたと書いてありますが、途中で飯田家義といふ者が、景親の軍に従つて居たが、心を頼朝に寄せて六騎で、景親の軍に斬入つたので、頼朝はその隙に乗じて梶山に入つたと書いてある。どの邊であるか想像がつかぬ。そして曉天に梶山内堀口(盛衰記には堀口)で一旦陣形を直して景親の追撃軍と戦つた。即ち窮鼠猫を食んだのである。さて梶山とは何處か、内堀口とは何處か、今知る事は出来ぬ。吾人の想像する處によれば、杉の森林があつたから梶山と謂つたのであらうと思ふ。現在吉濱村鍛冶屋川の上流に大杉の方から来る川と、白銀山から来る川と合する處がある。その邊に小平地があつて、如何にも杉の原始林でもあつた處の様に思はれる。今も此邊から鍛冶屋の村落にかけて田畑の底から神代杉が澤山顯はれるといふ事であるから、杉の大木のあつた事は證明される。そして内堀口といふ名は如何にも低い處と思はれる。若し此の地が所謂梶山内堀口であれば「頼朝じがみ水」と土地の人といふ徑六尺許

の池が暮山の西北にあつて、今でも清冽な水が湧くが、これは顔容を水に映して整容した處といふから、自鑑水と書くのが最も近い様に思はれるが、自害せんとしたといふので、自害水ではないかといふ説もある。

梶山の戦争では加藤景廉や、佐々木高綱、天野遠景などよく戦つて居る。頼朝も身を廻らして射た。それが百發百中であつたが、矢が盡きたので、景廉が馬の口を取つて深山に引き入れた。諸將が頼朝を尋ねて往くと臥木の上に立つて居たと吾妻鏡に書いてある。盛衰記には「臥木の中に七八人隠れて」と書いてある。世間有りふれた傳説の様に大杉の空洞に隠れたといふ記事はない。而して實際を踏査して見ると、鍛冶屋川の上流から、箱根又は伊豆方面に出るのにはあの有名な土肥の大杉の附近を是非とも通らなければならぬ。北方は山高く、而してその裏には須雲川の上流は屏風山の斷崖があつてなか／＼通られない。そして南即ち左の方湯河原方面も嶮山で、唯大杉の處が緩漫で通過し得られるのである。その大杉たる大正六年九月三十日の暴風で倒れて、今は株のみであるが、年輪を見れば千年以上のもので八かゝへもあつたものであるから、少くも頼朝の逃走を見下した杉である。原始林たる梶山の最後の子孫であるといふ事から天然記念物たる價値は十分にある。

此時土肥實平は多數の者が頼朝に従ひ死生を共にすべしと慕ひ來れるを見て、かくては隠れるのに困る。御一身であれば自分が十日でも一月でも隠す事が出来ると申出したので、多數の者も尤もの事であるので、涙を流してそれ／＼落ち延びたのである。

それから頼朝は景親の爲に發見せられんとしたが、梶原景時早くその所在を知り「此の山に人跡なし」と言つて景親の手を現いて傍峰に登らせた。此の時頼朝は髻の中の丈二寸の銀の正觀音を或巖窟に安置して、敵に首級を獲られたる時に、命を惜んだ様に思はれて耻しいと言つたといふ事もある。

梶山の戦に敗れると、北條宗時と狩野茂光とは、郷里を指して逃げた。其の道は大杉附近から、箱根町の南半里にある鞍掛山の南に出で、十國峠から岐れて、西の方桑原に下り、唯今の丹那トンネル西口附近の平井郷早河の邊で、景親

の軍兵に追及せられ、宗時は紀六久重の爲に射取られ、茂光は老いて肥滿せるので敵の手に掛るより子親光の手に懸りたいと言つたが、親光が逡巡して居るので自殺してしまつた。頼朝は多分此の中に居ると思つて強く追撃したのであらうと思はれる。頼朝は幸に箱根の方に轉じたので助かつた。

箱根別當行實は頼朝の父義朝の推薦でその職に就き、これまで祈禱を頼んだ關係がある。二十四日の晩弟永實をして駄餉を持たしめて頼朝を尋ねさせた。そして幸に相山附近で頼朝に遇つたので、頼朝は餓ゑざる事が出来た。そして永實を案内として密に箱根権現に到つたが、參詣者が群集するので永實の宅に宿つた。然るに弟良遠は山木判官の祈禱師であるので、頼朝を謀らんとした。そこで翌二十五日の朝山案内者をつけて頼朝は實平等と箱根通を経て土肥郷を指して落延びたのである。

それから二十五日、二十六日、二十七日の晩は何處に泊つたか不明で、二十八日眞鶴崎から舟で安房を指して逃れるのでありますが、その間にかの小道地藏堂の事件が起つたと思ひます。これは源平盛衰記の記事で、梶原に助けられて後、箱根権現に宿つた事がぬけて、主従八騎小道地藏堂に隠れた事が記載されてあるが、私は右の三日間に起つた事と思ひます。即ち箱根から土肥郷を指す間に此堂に隠れたと思ひます。其の事實は僧純海に自分等の身分を明かして頼むと純海は快諾して一行を佛壇の下、これは山寺であるから非常の場合には坊さん自身が逃れる處に依つて置いた處にかくすのであります。景親は追つて來ると、純海は平氣で讀經して居るので、怪しんで拷問して氣絶せしめ、先に進むと頼朝一行の者が窺に其の有様を見て、呼吸を吹返させると、純海は「景親は賢い人であるから引返して來るに違ひない」といふので、主従八騎は落ちて行つたといふ記事であります。其人數から見ても石橋山から直ちに此寺に逃げ込んだでない事がわかります。今は小道地藏堂は吉濱海岸にあるが、昔は山上にあつたと傳へられ、そして山上に寺屋敷といふ地名の處があるといふので、本年八月十一日文部省史蹟調査の矢吹活禪氏や安田善衛氏などと案内者をつれて行つて見ると、星ヶ山の南東側八合目の茅山の中腹に二十間四方ばかりの地が平らかにされて、今は一面に茅が生えて居りま

すが、歩いて居る中に礎石を發見しました。そして其處に七間四面の堂のあつた事が礎石でよく知られました。これで盛衰記の記事が小説でなく、かの日金時に日金地藏堂がある様に、眞鶴方面から箱根往復の山路に此堂があつて、山越えの盛なる昔、休憩所や宿泊所にしたといふ事がわかります。それから鍛冶屋川の上流、相山と思はれる處の西方に櫻郷といふ所に巖窟があつて、頼朝の隠れた處と傳へられて居るが、そのことがあつたとすれば箱根の前か後か不明であります。土肥實平の妻は賢い人で、頼朝の隠れて居る中に、窺に食糧を送つたといふ事が盛衰記に書いてありますが、此時の事ではないかと思ひます。暫く問題として置きます。

そして二十八日土肥の人貞恒といふ者の小舟に乗つて眞鶴崎を發するのでありますが、それが鵜しとの岩屋を出て船に乗つたと傳へられるので、有名な七騎落であります。そして房總を廻つて勢力を回復し、大軍を率ゐて鎌倉に入つたのが十月六日であります。(十月十二日石橋山に於ける頼朝公旗揚七百五十年祭講話)

## 資料 教材

### ペルーの甘蔗栽培

外務省通商局編纂「移民情報抄」

甘蔗は「ペルー」の重要な農産物で、同國の砂糖産額は年約四〇〇・〇〇〇米實噸其内三六〇・〇〇〇噸は輸出されてゐる。甘蔗栽培方法はあらゆる點で近代である。「ハワイ」を除いては世界何處の國に於ても甘蔗栽培事業に之丈の注意を拂つて居る處はない。

或砂糖の専門家は「ペルー」の甘蔗耕地は世界中で最も完全に準備されて居ると述べて居る。各畝の間隔は「四ワイト」位で甘蔗は畝と畝との間の溝に植えられ畝の上ではない。此は若い甘蔗の根に水及肥料を十分に供給する爲である。種として使はれるのは甘蔗の頭部丈で其頭部は普通十八乃至二十四「インチ」の長さで、四五度の角度で凡そ「十インチ」位の間隔で植えられるのである。(苗挿法)。植付作業は男の子がやり、頭部を土に埋め、その上手で二、三「インチ」許り柔く砕いた土をかける。植えてしまつと水を少量これにかけるのである。

幹を切り取ると直に新しい幹が古い根から前と同じ様に成長して來る。こんな具合に一本の木から五回乃至六回、或はそれ以上の收穫が得られる……。



# 源 頼 朝

演 講

國學院大學教授 大 森 金 五 郎

源頼朝の幼時……配流中の頼朝

私人としての頼朝……家庭人としての頼朝

公人としての頼朝……敬神崇佛並に勤王心

頼朝に就いては、或は政治家とし、或は軍人として屢々論ぜられる所ありますが、私は人間としての頼朝——といふ考のもとに次の要項によりましてお話を進めて行きたいと思ふのであります。

頼朝の幼時

配流中の頼朝

私人としての頼朝

家庭の主人としての頼朝

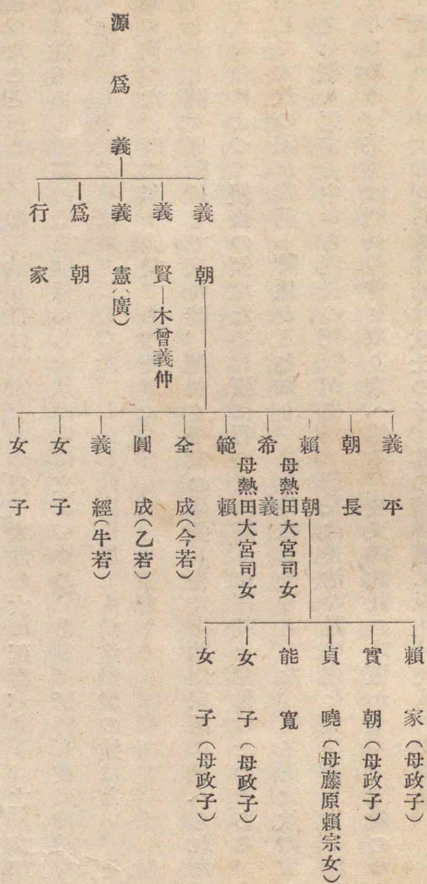
公人としての頼朝

敬神崇佛並に勤王心

此の問題に就いて話せば頼朝とは如何なる人であるか大體分ると思ふ。お話を進めるに就いては系圖が必要である

ので印刷物(左の)系圖を参考して頂きたいと思ふのであります。

源 氏 系 圖



こゝで一つ注意すべきことは、女子は必ずしも年長順でなく、女子は一番終りに書くことを一言して置きたいと思ひます。系圖は斯の如しであります。愈々問題の人頼朝の話に移りたいと思ひます。

## 頼朝の幼時

頼朝は近衛天皇の久安二年の生れであり、生れた所は熱田大神宮のほとりである。之は母が熱田大宮司の女であるからである(藤原季範の女)。此の家系を尋ねると、非常な舊家であり、日本武尊の東征の時の宮簀姫の家である。此の家が代々熱田を祀つてゐたが、後藤原氏を婿にしたため藤原氏を名乗る様になつたのである。しかして熱田大宮司女のは

義朝の正妻であり、其の同腹兄弟は系圖の如くである。古の事は明瞭ではないが、生れて後京都に出たものと察せられ初めは頗る幸福な家庭であつた。然るに忽ちに不幸は頼朝の家庭を見舞つたのである。平治元年三月一日母親が没した此の時頼朝年十三歳、同年の末に平治の亂起り、頼朝も戦に参加したが利あらず、父義朝は尾張に於て長田忠致に殺されてしまつた。母に死に別れ、又平治の亂に父を喪ふが如き不幸に遭遇したのである。

平治の亂に敗れた後、頼朝は途中まで父と共に逃げたが雪の爲に遂にはぐれてしまつた。ところが近江の人大夫屬官定康これに同情し、自分の氏寺の大吉祥の梁の上に隠し、そして食事を運び與へ、後自分の家に迎へた。こゝで月日を送つたが追々雪もとけたので、此所より美濃の青墓驛あきはかに來た。此處の驛の長大炊なる者があつた。父義朝は嘗て此所に宿つたことがあり、即ち泊り付けの家であつた。大炊の女に延壽があり、之が義朝の妾であり、此の間に生れたのが夜叉御前である。斯の様な關係から大炊の家に立寄つたのである。延壽も夜叉御前も非常に喜んで迎へてくれた。然し乍ら話は悲しい父の事ばかりであつた。しかし此處に居ても前途發展の途はない。そこで獨立の決心を起し、青墓より東國に向つた。時に年十四歳であつた。

しかし關ヶ原附近まで來た時、運悪く平家の侍彌兵衛左衛門尉宗清に捕へられた。宗清は平頼盛の家臣である。宗清主人の命によつて頼盛の領地なる尾張に行つての歸りに頼朝を見付けたのである。宗清頼朝を伴ひ大炊の家に立寄る。然して大炊の家が義朝と關係あるを知り、之を吟味しやうとした。すると大炊の家の新しい墓が発見されたので、宗清之を掘り返すと中から朝長の死骸が出た。朝長は平治の亂に傷を負ひ苦しさの餘り遂に父義朝の手にかゝり死を遂げたのである。宗清は朝長の首を取り京へ歸る。夜叉御前此の時僅か十一、二歳の少女であつたが遂に株瀬川に身を投じて死した。少女ながらも流石は武士の子、其の精神實に見上げたものである。

頼朝はかくして京都に赴く。頼朝の幼時は斯の如しである。

### 伊豆配流中の頼朝

頼朝を捕へた宗清はどんな心持を持つてゐたのであらうか。情のない武士の様にも見えるが、種々の實例から考へて想像するに、情のない人ではなくして同情を有してゐたのである。併し頼朝を逃せば自分の落度になるから捕へた。

しかし内實は助けたい考であつたらしい、それは頼盛(自分の主君)の實母(清盛の繼母)池尼を尋ね、頼朝を捕へた話をした事でもわかる。池尼は情深い人である。池尼は宗清に『頼朝はどんな人であるか』を尋ねた。宗清の曰く『なくなつた右馬助殿によく似てゐる』と。右馬助は頼盛の兄で家盛といひ廿歳を過ぎて後死したものである。此の話で右馬助によく似てゐる事を知り、殊更不憫の情を起し是非共助けたい氣持になつた。池尼は、頼盛、宗清をもつて清盛に頼朝助命の歎願に及んだのである。

清盛は『義朝の子は助けられない。殊に頼朝は父義朝が見所ありとした子である故に尙更助命する事は出来ぬ』とはねつけたが、池尼は再三歎願したのである。清盛も實母なら兎に角繼母なので實は持て餘してゐた。然るに頼朝の様子は如何と見るに、未だ十四歳でありながら塔婆を作り、經文を書き寫す仕事をしてゐる。『何故か』と尋ねると『親、兄弟、叔父等一族は保元、平治の亂に皆なくなつてしまつた。自分でなければ誰も親兄弟一族を弔ふものがない。だから自分はこの様な事をするのである。』と答へた。之れが非常に同情心を起さしめて、池尼は遂に清盛の子重盛を説き、重盛から父清盛に頼朝助命を歎願せしめた。重盛も極力父を説いて『平家の運命が若しも盡きるものであるなれば、たとへ頼朝を殺したとて亡びるに相違なく、又平家の運命が盡きぬものならば頼朝を生かしても亡びる事はなからう』とて歎願する。清盛も遂に考へ直した。清盛は腹の大きな人であり、頼朝の死刑は延期となり、當面の問題は先づ過ぎたのである。後池尼等の歎願切なるに動き、それならばとて伊豆の蛭ヶ島に流す様になつた。蛭ヶ島とは海中にある島の謂

ではなく地名である。伊豆の北條、葦山の近くにある土地である。清盛は茲に頼朝を移し、伊東祐親をして監督させることにした。

愈々助命となつた時に池尼は頼朝に向ひ『あなたの爲には非常に盡した。尼は年若の頃より憐は深かつたが、年寄りになつてから自分の力だけでなく人の力を持つて助命を歎願した。であるから今後は狩や弓矢の稽古などは一切断つて貰ひたい。人の口はさがらないものであるから再び尼に悲しみをかけて下さるな。』と、淳々としてさとした。頼朝も尋常では助かるものでないから、尼の真心は心身に徹したことであらう。愈々東國へ下るに當り家來は或は髪を割れと言ふものもあり、或は削るなど言ふものあり、纏源吾なるものは極力髪を削るなど言ふ、兎に角頼朝兩方にたゞうなづくのみで、それ程に従順な彼であつた。後の人頼朝助命の事を評して曰く『千里の野に虎を放つが如し。』とも言つた。とにかく頼朝は助かつて流されたが、此の時分の頼朝は決して兵を擧げやうなどの如き輕薄な考は持たなかつたと信ずるのである。

愈々流される時の同情者としては、亡母の弟に藤原祐範(叔父)があり、人をつけて之を伊豆まで送らせた。又因幡國の住人長田兵衛尉實經の父資經在命中同情し親戚の人をつけて配所に送る。それから比企の尼がある、それは比企掃部允といひ夫婦して養育係であつた。比企氏武藏國比企郡に移り、之より二十年間世話をした。夫婦部允は早く死したが尼は忠實に頼朝に力をつくした。子供がなく養子をしたのが即ち能員である。又三善康信も頼朝に同情した。其の理由としては康信の母は頼朝の乳母なるもの、妹である關係であつた。康信は其の後二十年間毎月三度京都の事情を頼朝に知らせたとか、以仁王擧兵の時などは眞先に通知したのである。又頼朝の乳母も三・四人はあつた。斯くの如く同情を力を盡す者もあつたが、當時の源氏の勢力の失墜は話にならぬ程であつたから、多數の者は顧慮しなかつたのである。

さて伊豆の配所にあつた頼朝は何をしてゐたのか、十四歳で流され卅四歳の擧兵に至るまでの二十年間を如何に過したのか。吾妻鏡には、歎いて廿年、憂ひて四八(三十二)餘りの年を過す、とあり、其の間何をしたのか。

此の間の頼朝は前後から見ると熱心なる神佛の信者であつて、これ以外は全く餘念がない。一度助命せられたからとて後から舌を出す様な事は絶対になかつた。或人は清盛は寛大であつて頼朝を少しも疑はぬといつてほめてゐるが、しかし二十年間の頼朝は實に身を守ること堅固、一點の疑念を挿入せしめなかつた事が非常にえらい所であると思ふ。

愈々擧兵の事情の時、伊豆山の尼僧の法音尼(政子の師匠)を呼んで言ふに、『これより戦争に出る爲め日課を守る事が出来ない。ついでには代つて日課をつとめてくれ』と。之れまで頼朝には日課があつて一日も怠つたことがないといふ。日課は吾妻鏡に

心 經 十九卷——八幡、若宮、八劍、大宮根權現等十九の神佛に一卷をさしける。毎日よんだ實に大變なものだ、尙其の他に

觀音經 一卷

壽命經 一卷

毘沙門經 三卷

藥師 呪 廿一反、尊勝陀羅尼七反、毘沙門呪一百八反

諸願成就子孫繁昌の爲によみ上げる、それから阿彌陀佛經千百反をとる。此の中千反は父祖頓生菩提の爲、百反は鎌田政家の得度の爲に唱へる。以上の様な日課があつたが、之は實に大變なものである。斯くの如き態度であつたればこそ誰一人疑ふ者もなければ、清盛の耳に惡聲の入ることもなく、疑ふこともなくして濟んだ。斯の様に信心堅固であつた彼が擧兵したのは何故だらうか。これは時の勢が然らしめたのである。

平家は既に人望を失つてゐる。以仁王の擧兵、頼政の擧兵は勿論失敗はした。しかし平家討伐の令旨は方々に降つたのである。頼朝がたとへ擧兵せると否にかゝらず、必ずや平家は討たれる運命に置かれたのである。二十年間頼朝に音信した康信は使を遣はして告げた。『平家は今東國の源氏を討つと言つてゐるが、それはあなたのことだ。最早絶對に絶命だ、急いで奥州の藤原秀衡の所へでも逃れなさい。』と言ふ。しかし武人肌は擧兵せよと言ふ。絶對絶命運命の決す

る所生死の境である。茲に於て頼朝は堅く決心し、父の復讐をなすべく遂に擧兵するに至つたのである。初めから擧兵を考へてゐたのでなく、絶對絶命の場合生死を堵してやつたのが遂に成功したのである。

私人としての頼朝

世一般に頼朝を評して冷酷な人、猜疑心の深い人といふ。彼の境遇より考察する時に、確かに斯の如き點もあらうかと思ふ。然し乍ら之は頼朝全體を見たのではない。我々はもつと人格の點を見なければならぬ。

頼朝は一方人に長たるの雅量に富むと同時に、他方に於ては人情美に富んでゐたのである。もしも此の點を缺いてゐたら偉業は出来ぬ。義仲の如くんば如何に。人心を引き付ける所なくんば偉業は出来ないと思ふ。左に頼朝の美點と稱すべき實例を引いて見よう。

(イ) 敵に對して

敵に對して非常に同情心を有し、言語、舉動等に感激する所があれば直ちに罪を許して家來にした。

治承四年頼朝常陸の佐竹義秀を討ち平げた時數多の捕虜を得た。捕虜の中に岩瀬與一太郎なるものがあつた。獨り頭を下げて考へ込んでゐる様子が頼朝の目に止つた。頼朝曰く「何を考へてゐるか」と、與一は「私は主人が亡びた事を悲しむが、そのみではない。源氏といひ佐竹氏といひ之はお互源氏同志一族ではないか。敵は平氏であるのである。内輪喧嘩をする様では前途が氣支はれる。それでどうして天下平定が出来ようか。私は之を考へ悲しんでゐた」と答へた。頼朝非常に感動し岩瀬與一を許したのである。

文治五年頼朝奥州藤原泰衡を征伐した時、彼の名代の男由利八郎が捕へられた。頼朝由利八郎に向つて「汝が主人泰衡は勢力ありと聞いた。然し此の度の戦の弱さは何たる様子である。戦らしい戦なく二ヶ月にして滅亡し、剩さへ首は臣河田次郎に取られし事は何たる事であるか」と、由利は「尤もである、併し家來は多くあれど一流のものは皆國境方面へ出し、主人の左右には老人子供の子孫であり、私の雅量が人を感じしめたのである。」

如きも遂に捕虜になつてしまつた。然し乍ら考ふるに、平治の亂には如何、義朝は東海道の都督と聞く、之れが一日の戦争に負けて、剩さへ首は長田にとられたではないか。彼と此を比較するに勝劣は之れ如何。」と、由利の壯言と意氣の熾なるに感じ罪を許して家來とした此の雅量が人を感じしめたのである。

世間では長田庄司忠致に對して、充分働かした後慘虐に之を殺したとて之を批難するが、之は平治物語にあるのみで他には全く記録なく似よつた話さへ録してない。よしやあつたにしても、彼は親(義朝)を殺したもので、親の仇である別に不都合な事はないのである。

(ロ) 恩人に對して

池尼は既に生存してゐなかつた、頼朝は恩返しすべしとて姪女を鎌倉に呼び、「池尼に報恩すると同じ心持で酬むたいが、何なりと申し出でて貰ひたい。」  
姪女「婦人の身として何も望む所はない、たゞ尼となつて人々の後世を用ひたい」と申し出た。其の爲に頼朝は太平寺を作つた。(縁切寺の創、東慶寺も前例なければ創らぬ事だらう。)

頼盛に對して

頼盛には常に報恩しやうとしてゐた。此の時平氏は宗盛全權の時、しかして宗盛と頼盛との間はとかく疎であつた、それで頼朝は屢々頼盛を東國へ寄せようとする使を出した、頼盛も遂に心動き、臣宗清に「平家を見限つて東國へ下らんとするが一緒に行かぬか。」と話をしたが、宗清は

「場合が場合です、東國征伐ならば喜んでお供させて頂くが、御恩返しの特遇をお受けになるお供は出来兼ねます。」  
頼盛「お前が止めにするならば自分もよさう」

宗清「平家一門が西海で生死の定かならぬ中に活動するのに、宗清が東國へ行く事は恥かしい、心苦しい。しかし主君は何でもない、お出でなさい」と言ふ。  
そこで頼盛遂に東國に下る。頼朝大いに喜んで之を歡待する。



頼朝『時に宗清は如何なされたか』

頼盛『彼は病氣故後より追付け参るでありませう。』

と答へる。頼盛鎌倉に滞在し領地は又元の様に返された。其の上に恩賞さへ頂いた。愈々京都へ歸る時、頼朝再び『宗清は如何なされたか』と尋ねる。

頼盛弱して、『追付け来る筈なのに未だに來ない。どうしたのかしら。』その場を濁した。

頼朝『宗清の來らざる事は實に残念だ。』と嘆聲を發したといふことである。

此の時頼盛には鞍置の馬三十四、裸馬三十四、長持三十竿を與へて京へ歸した。

池尼や頼盛等の恩人に對する心持は斯の如くであつたのである。

### (八) 功臣に對して

三浦義朝——義澄  
義連

三浦氏は親子など率先して兵を擧げ、頼朝に参加して衣笠城を死守した。江戸氏、秩父氏、畠山氏等之を攻めたので遂に三浦義明守り切れない。此の時義明『自分は老齡(八十九歳)である。お前達は頼朝を尋ねて行け。自分は一身を捨て、汝等の功にする』とて討死した。斯くの如き立派な志であつた。頼朝は此の恩義に感じ、建久五年三浦郡矢部郷に堂を建て、後を弔ひ、義澄、義連兄弟は重用せられた。

岡崎義實(三浦義明の弟)の子佐奈田余一義忠と、其の臣豊三家康は、石橋合戦の時眞先に討死した。建久元年正月十五日頼朝鎌倉を出發し、伊豆、菅根兩所權現參詣の時、小田原より石橋山にかゝつた時、義忠、家康の兩人の墓を見て落涙止むる能はず、しばし其の場を立去ることが出来なかつたとか。これからは參詣の道順をかへて島から伊豆山——石橋山の順路によつて、思ふ存分に泣かせてくれと言つたとか。

文治三年十月二日、由井ヶ濱に犬追物があり、其の時岡崎義實の家を尋ね、余一の子息小童を召出してあはれみの言葉かけたといふ。

飯田五郎家能は石橋山の戦の時、大庭景親の軍中にあつたが、其の志は頼朝にあり、後頼朝を助けた。後日平家と戦つて伊藤武者次郎の首をとり、それを持つて頼朝の前に到り『只今之なる者を打取りました、しかし長男は戦死しました』と言ふ。頼朝之を聞いて非常に感動し、『家能は本朝無双の勇士である。石橋山の戦功に次ぐに、今亦斯くの如き勳功がある』といつて激賞した。

部下の功臣等に對して手厚いことは實に斯の如くである。又千葉常胤に對しては『親とも思ふ』といふことを言つてゐる。

### (二) 親兄弟に對して

親兄弟に對する心掛けも亦非常に厚いものであつて、前述の配流中の頼朝の日課たる千百反の念佛は、實に父祖頓生菩提の爲に唱へられたものである。

治承五年三月一日母の爲に盛大なる佛事を營む(三月一日は母の命日)

文治五年八月三十日、兩親の爲に一伽藍を建立すべく朝廷に願つた。それは義朝及び政家は京都に梟首にされて獄門にあるので、之を勅許を得て賜はつた。そして文覺の弟子が之を持つて鎌倉に参る。この爲に建てたのが勝長壽院であつて此所で供養をした。

建久元年十月上洛した時、尾張國野間庄に立寄り、父の墓もあれてゐるだらうと思つて見ると、立派な墓あり御堂あり僧が多く居て念佛を唱へてゐた。之を見た頼朝は非常に感激した。之は平康頼入道が尾張を治めた時、義朝の墓に水田を興へたのであつた。頼朝は感激し堂の僧侶を優遇し、康頼に對しては四國の阿波の麻殖保に司とした。

美濃の青墓に立寄り大炊の娘達に纏頭した。

文治三年六月十三日には、父義朝の乳母であつた麻々局(八十七歳)を呼出した。局は平治亂後、京都より相模國早川庄へ下り七町ばかりの田地で世を送つてゐた。之を呼出して父の幼少の頃の話を聞き、涙を流しつゝ非常に感動した。

建久三年二月五日、此の時摩々局から頼朝に良酒を持つて(九十二才)會ひに來た。年をとり餘命短から會つて置きたいと言ふ。頼朝感激し、會つた後早川庄の年貢は免除し、新たに三町の田を興へた。かくの如く數多の美談があるが、かくまでに盡す人は珍らしいと言はねばならぬ。

妹に對して——頼朝の妹は後藤兵衛實基の養女となつて世を過してゐたが、後藤原能保の妻となる。公卿の妻に骨を折つたのである。後將軍實朝の殺された時、妹の血を引いた藤原頼經が將軍となつてゐる。

希義に對して——希義は平治の亂後土佐の介良莊に流さる。後頼朝舉兵の時平氏之を攻めたので、希義遂に自殺した。頼朝之を惜み菩提寺を建て土地を之に付けたのである。

範頼——範頼の母は池田の遊女であつて頼朝とは大身分が違ふ。然し乍ら頼朝は決して之を疎にはしなかつた。小心ものであつた故に殊に深く心遣をしてやつた。併し範頼は失敗をしてゐる。即ち建久四年富士野に於て卷狩をした時

範頼は留守居を命ぜられたのである。曾我五郎、十郎が裾野に於て親の仇工藤祐經を打つて取つた。此の報が鎌倉へ頼朝殺さると誤傳された、政子の驚は如何ばかりであつたらうか。範頼之を慰める考へからして、『心配召さるな、私が居るから御代も心配にはならぬ。』と言つた。此の言葉の中、頼朝無くも御代は心配ない、との一言が彼の失策であつた。やがて頼朝暗殺説は誤りとなり歸つて來た。政子は頼朝に範頼慰撫の言を告げたのである。之を聞いた頼朝は非常に驚いて、彼は天下を覗つてゐるのか。と警戒せられる様になつた。百方辯護に力めたが無駄であつた。

又運の悪い時は何處までも悪いもの、範頼の家臣の當麻太郎といふ者が、主人を思ふの餘り頼朝の邸の縁の下に這りひそんで様子を覗つた。之が遂に發見され引出して見れば範頼の家臣と判つた。茲に於て頼朝暗殺説は愈々疑は濃厚となり、辯解の餘地さへなくなり、當麻太郎は薩摩に流され範頼は伊豆に流され、後此の地で變死するに至つた。

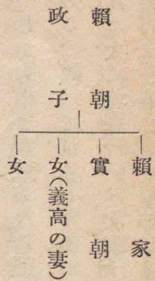
義經問題——世に判官びいきがあり、とかく頼朝を批難攻撃するが、義經も亦落度なしとは言へない。しかし本日は此の問題は詳説しない。

### 家庭の主人としての頼朝

朝頼は伊豆にある間、伊東祐親の女と關係があつた。當時祐親は留守であつたが、歸つて見れば女が子供を抱いてゐる。しかも相手が敵方なる頼朝なので非常に怒り子供は之を殺し、女は他に縁付け頼朝を殺さんとまでした。祐清が之を知り、頼朝に密告したので危難を免れる事が出來たが、家庭人として第一に失敗してゐる。

其の次に北條時政の女政子と關係した。當時政子は山木判官兼隆の妻となるべく交渉があつた。愈々話は進行して式の當日になつたら政子は失踪し頼朝に身を寄せてしまつた。遂に式は成立しないので時政非常に怒つたが、頼朝の人物を見抜き、且つ野心家であつたので其の儘にしてしまつた。政子は頼朝に對して執着心強く、又頼朝を信じてゐたので

ある。かくして幕府創成の一夫婦は出来上つたのである。頼朝、政子の間の家庭を見るに



斯の如く幸福である。政子は男勝り即ち女丈夫であり、嫉妬深く貞操觀念の強い人であつた。曾て義經の妾靜御前が捕へられ鎌倉へ來て舞を舞せられたことがある、其の時

吉野山みねの白雪ふみわけて 入りにし人の跡ぞこひしき

しづやしづしづのをだまきくり返し 昔を今になすよしもがな

と、お尋ね者の義經のあとを慕ふ舞を舞つたのである。頼朝非常に機嫌を損じて怒つたが、政子は自分と靜の身の上下とは同じ境遇にあつたことがあつた。政子が頼朝の流人として伊豆に居つた時代、擧兵して後行方不明になつた時代の自分の苦衷に比較して、靜の貞操觀を賞し、心の感を其の儘舞に現はしたので、之は寧ろ賞すべしとて極力之を和めたのであつた。政子の態度は實に斯の如くであつたのだ。頼朝は家庭の主人としては實によりき夫人を得たのであつた。

しかし子供はどうか。政治上の問題は實に六ヶ敷いのである。頼朝の長女大姫君は木曾義仲の子志水冠者義高が質として鎌倉に來た時に妻されたのである。此の時義高年十一歳、大姫君は五か六つの子供であつた。後義仲と頼朝とが不和になり義仲討たるゝの時義高も殺された。しかし頼朝は一切大姫君には秘密にして置いたが、遂に姫の知るところとなり、姫は悲歎の餘り寢食を忘れる程に目を追ふて憔悴し、何かすると入水の恐れがあるので、政子、頼朝は心配して之を一條高能に再嫁せしめ、心機の一轉を圖らんとしたが、斷然之を拒絶し強ひて再嫁せしめんとするならば淵に身を投ずとまで言ひ出したので、流石の頼朝も之には弱り、自分の非を悟つて人をして陳謝せしめたといふことが吾妻鏡に

見えてゐる。後鳥羽上皇の女房としての話もあつたが、大姫君は後間もなく病死してゐる。

頼朝は第二女をして後鳥羽上皇の女房に上らしめんとし、女房の宣示までも下されたが、間もなく頼朝は病死し、續いて二女も病死してゐる——年十四歳、家庭人としての頼朝は實に子煩悩であつたが、子供には不幸せであつた。

然し頼朝は死んでよかつたのである。長子頼家は伊豆の修善寺に幽閉せられて變死し、實朝は二十八歳にして鶴岡八幡の石坂で最後を遂げてゐる。人生とは實に様々なものである。幸、不幸は天のなす業であり、人生の約束である。

政子は六十九歳まで長生をして源家の家庭の悲惨な事は皆知つてゐるのである。頼家も實朝も皆喪つて後、承久の亂に自分の身を歎いてゐる。其の大意を述べると

日本國に女房としてめでたきは政子であるといふが、尼程悲しみの多いものはまたあるまいと思ふ。頼朝が兵を擧げた時自分の心を身を神佛に祈誓し、安からぬ思をしたが、石橋敗戦後六年間心配し、遂に平家が亡され天下泰平と思ひしに、大姫君におくれ何事とも思はず同じ道にと悲しんだ。然し悲しむは亡き人の爲に悪いと思ひ日を過す程に公殿失せた。今は最早死すべしと思つたが、頼家も小さい之を見捨てるも如何と思つてゐる中にこの人(頼家)も死んだ鎌倉中うらむ事はかりであつた。又其の中實朝も死んでしまつた。我むなしくなつたなら鎌倉は滅び三代の菩提を弔ふものはない。——とて女丈夫な政子も非常に悲しんだのである。圓滿であつた頼朝の家庭も斯くの如き悲惨事にして終つたのである。

### 公人としての頼朝

公人としての頼朝は如何と見るに、武人統一に心を注いだのである。而して完全に武人統一の出来たのも始終之に注意した結果とも考へられるが、一面頼朝は武人を統一する——引きつけるだけの人格を備へてゐたのである。

頼朝、石橋山の戦に敗れ房州へ逃れ渡つた時のことである。千葉常胤は早くより頼朝に従ひ忠勤に擢んでゐた。然し乍ら廣常は心決定しなかつたが後頼朝の後を追ひ隅田川で追ひ付いた。そして頼朝に面會を求め其の臣たらんとした

此の時頼朝の兵は漸く千人内外、廣常の軍は二萬と呼ばれた。何故大軍を擁する廣常が小數の頼朝を討たなかつたらうか。茲が頼朝の人格、威靈の然らしむる所である。面會した時頼朝は『何故に來り會することが遅いか。以後勳功なければ會はぬ。』と言つた。此處が頼朝の偉い所であると思ふ。曾て將門の亂の時、依藤太秀郷、將門に一臂の力を添えんとて面會をした事がある、其の時將門は髪を束ねてゐたが、大いに喜び、髪をつかねたまゝ輕率な態度で會つた。此の態度を見た秀郷は將門は將來事をなすには不足である——と引返したのである。彼將門と此の頼朝の人物を比較するに實に斯くの如くである。廣常はたつた一言で頼朝に従ひ、以後は頼朝の功臣となつたのである。

木曾義仲に對する態度も、臣として考へるのであつて、同等とは見ないのであつて、こゝに頼朝と義仲との衝突あり義仲没落の憂目に遭遇したのである。弟義經の没落も亦全然同一の事情である。

不公平の出来なかつた人で、常に公平を期したのである。曾て瀧口三郎經俊なる者死刑に處せられやうとした。經俊の母は頼朝の乳母であつたので歎願に出た。そして先祖の功を述べて經俊助命を乞ふた。すると頼朝は家臣に命じて鎧櫃なる鎧を取寄せた。其の鎧には矢が突き刺さつてあり、矢に瀧口三郎藤原經俊と書いてあつた。之を示したので一言の辯解もする事が出来なかつたとか。しかし後頼朝も惻隱の心あり死刑は許したといふ事である。

任意といふ者があつた。之は熱田大宮司で、父は頼朝の母の弟藤原有範の弟である。曾て熱田大神宮に屬する田を勝實といふ人に掠め取られた事があつた。故に任意は頼朝の授けにより、頼朝に縁故あるより權勢を借りて之を取り戻したいと願出た。然し頼朝は之を聽き入れなかつた。本來勝實は勅許になつて之を領してゐた。しかしせうせい門院が勝實に許さずといふ證據物件がある。之に依りて解決をしたのである。斯くの如く頼朝は非常に義理堅い人であつた。範頼や義經等の如く身内ならば尙更此の關係を嚴にしたのである。

### 敬神崇佛並に勤王心

前述の配流中の頼朝の項に於て説いたやうに、頼朝には日課があり、戦争の時法音尼を呼んで自分の日課を頼んだこ

とも頼朝の敬神崇佛の念のあらはれであると思ふ。又山木判官兼隆追討を十七日と定め、十八日は觀音様の日であるといふので之を避けてゐる。愈々十七日と決定したが佐々木高綱が兵到らず、頼朝心を惱したが十七日の午後に到り漸く佐々木兄弟來る。晚に討てと言つて十八日を避けてゐるが崇佛のあらはれである。又八幡宮の信仰、菅根權現を信仰し之に相模の早川の庄をつけたといふこと、東大寺に米一萬石、沙金一千兩、絹一千匹を奉納した等の例は實に澤山あるが、頼朝の神佛崇拜は心から内面から出た信仰であることに注意したのである。

頼朝の勤王心に就いて一言するならば、壽永四年正月平家追討の時範頼へ出した手紙の中に『國司の心持を破らぬ様に、屋島に在す安徳天皇、二位尼其の他女房などに過あつてはならぬ。木曾義仲は御白河法皇の意に叛き、平氏は以仁王を討つて共に滅亡してゐる、皇室に對して無禮であつてはならぬ』と諭してゐる。又御殿の修理、伊勢大神宮の造營をなしてゐる。そして『納米を怠る事なかれ、若しも怠る様な事あれば頼朝でさへも勘當免れぬ、ましてや家來たちには決して怠ることなかれ』と戒めてゐる。

以上で大體に就いての話を終らうとするが、何故に頼朝は批難されるのだらうかを考へたい。これは判官最負なのと鎌倉幕府を開いたといふ點に存するのだと思ふ。判官最負は兎も角、幕府を開いた事に就いてはどうか。

當時の状態を救ふにはどうしても之をなさねばならなかつたのである。新らしい——東國にありて人心を新にし、警察權を興へて人心を其の堵に安んぜしめ、儒教の精神に基づきて治め、人民をして生命、財産の安定を得さしめたのである。幕府を開いて以來七百年、政權は武門に歸したが、後明治維新に至り大聖世に展開せられたのである。國の發達成長も其の過程に於て種々なる境涯はあるのである。

國家發展の過程中に於ける鎌倉時代も亦實に有意義なる事と思ふのである。(文責在記者)



# 行進 遊戯

## キャン・プ・ファイヤー

横濱第一高女教諭 小菅 一 男作

此の作は尋四・五年に相應しい材料で、作者の學校の一年生に試みた所大變喜んで踊り、見てゐて可愛らしいものだ  
作者は言つて居られます。

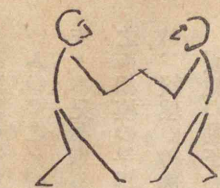
小菅教諭は、曲調より受ける純情の發露、清楚で簡易なムーブメント(手も足も)といふことを目標として創作に精進  
して居られる。『兒童の教材はその練習の爲に神經が突るほど難かしい動作を伴つてはいけない。尤も系統的に立案された  
合理的の基本訓練を経て進むならば、どんなに複雑した動作をやつても差支ない。その時はその外見の複雑も實演者にとつ  
ては簡易なものとなる』とは同氏の言であります。

(編者)

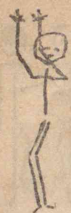
### 適用……尋常科第四・五學年女兒

用意……一組の人員を四十名とし、一列圓陣を作り番號をかけて置く。

#### 第一節



- (1) 八呼間——握手(互に顔を見合ひ乍ら……)
- 四呼間……一・二番生(三・四番生……)が合ひ合つて(互に右足を出し)互に右手で握手  
し乍ら上下に四回振る。
- 四呼間……同じく左手で握手。
- (2) 八呼間——握手(互に顔を見合ひ乍ら……)



- 四呼間……互に右廻轉して二・三番(四・五番……)生が向ひ合つて右手で握手。
  - 四呼間……同じく左手で握手。
  - (3) 八呼間……臂を體前に組んで、ホツピング。
  - (4) 八呼間……(3)と同じ。
  - (5) 八呼間……連手右方へ ガロツプ(若くはホツピング)
  - (6) 八呼間……連手左方へ ガロツプ(若くはホツピング)
  - (7) 八呼間  
四呼間……膝立姿勢となる。
  - 四呼間……「一」兩臂を右斜上方へ振り伸し、「二」兩臂を左斜上方へ振り伸す。以上線  
り返へす。
  - (8) 八呼間……前の動作を續いてやる。
- 第二節
- (1) 八呼間……連手方形を作る(一邊の人員を十人とする)
  - (2) 八呼間  
二呼間……三拍。二呼間……三拍。
  - 二呼間……兩掌を體前に翳し乍ら兩膝を少し左屈して伸す。
  - 二呼間……同前
  - (3) 八呼間……奇偶生互に肘を組んで ホツピングライトターン

CAMP FIRE

(代用曲)

Musical score for 'CAMP FIRE' (代用曲) in 2/4 time. It consists of six systems of music, each with a treble and bass staff. The melody is simple and rhythmic, suitable for a campfire song.

Parlophone B 50/0-A "Georgia camp meeting" より作意を起して完成す。

四呼間……兩臂を上擧して掌(開掌)を左右に振廻する

(6) 八呼間……(5)を繰り返へす。

(7) 八呼間……「ホルカステップ」で退り乍ら圓陣を作る。

(8) 八呼間  
二呼間……三拍。二呼間……三拍。



(4) 八呼間……同 ホツピンググ レフト ターン。

(5) 八呼間……各列毎に連手右方へ ガロップ。

(6) 八呼間……同 左方へ ガロップ。

(7) 八呼間  
四呼間……膝立姿勢となる。

二呼間……頸を少しく右に傾げ乍ら右頬の側で二拍する。

二呼間……頸を少しく左に傾げ乍ら左頬の側で二拍する。

(8) 八呼間……前の動作を續いて行ふ

第三節

(1) 八呼間  
四呼間……立つ(一)……左立膝、二……直立)

二呼間……三拍。二呼間……三拍。

(2) 八呼間……連手圓陣をつくる。

(3) 八呼間  
二呼間……右足(踵)前出。二呼間……右足(尖)後出。

四呼間……ツイステップで前進。

(4) 八呼間……(3)の動作をやる。最後に互に背後から肩に手を懸けて止る。

(5) 八呼間  
二呼間……頸を交互右(左)に廻す(奇偶生向き合ふやうに)  
以上繰り返へす。



## 確かな認識を目指して

橘樹・高津校 小林 錠太郎

七〇

### 子供の力の上に

「子供の力を知つて、その上に教育の殿堂を築き上げて行かなくてはならない」とは、誰しもが思ふことであり、又言ひ出さなくてもよい位當然なことでありながら、しかも「自分こそそれを實現してゐる者である。」と確信をもつて言ひ得る者が無いと言つてよい位、實際に行はれて居ないのである。

一步／＼と基礎からたゞき上げて行かなければ動きの出来ない算術科に於てすら、實力に關係なく、學年に應じ、學期に配當せられた教材を、教科書に従つて週により頁を追つて指導を進めてゐると言ふ状態である。豫想された子供の力の上に、一齊的な取扱が行はれて居ると言つても過言でないと思ふ。

新主義、新思潮の華々しい叫びにひきかへて、一般の實績の之に伴はないことはどうだ。之は誤信と、迷ひと、安逸との障碍があつて、正しい子供の力の認識が行はれないところに重大な起因を持つて居るのだと思ふ。

この障碍を除去するには、何よりも先に指導者の自覺奮起に俟たなければならぬけれども、次に重大な事項として目的観、教材觀の確立と、調査診断による兒童の力の確認の二つを挙げたい。

勿論分析的な科學的な調査診断が唯一の正しい認識への道であると過信しては居ないけれども、事實の上に立つといふ點に於て、調査診断を基とする指導は一つの力強いものを持つて居ることを信じて居る。

たとへ分析的であり、部分的であるとしても、少しでも

多く子供を正しく指導し得る方法をとらなくてはならない全部を求めて徒らに時を消費するよりも、一步を望んだ指導をこそ吾々は期すべきではなからうか。

### 調査に基づいて

吾々は本當に忙しい。自分の學級の仕事だけでも朝早くから、夜更け迄やつてもやり切れない位なのに、學校全般にわたる仕事、傍系的な社會教育に關する仕事、更に個人に關するものなど考へて來るととてもやり切れない氣がする。だから單に一教科目であるところの算術科の指導についても、あまりに困難な方法はたとへ良効果をあげ得るとしても、全部の人に望み得ないことになり易い。

時間的にも、勞力的にも、經濟的にも、費すところが僅少で得る所多いものを望むのは誰しも異論のない所である然しそれは單に安きを望むのでない故に算術科についてみても、次の事項位は全部の指導者が調査を試みて、その上に指導を進めてもらひ度いと思ふ。

#### A 前學年主要教材の徹底度

その學校及び縣下としての標準がほしい。

#### B 標準問題による調査

計算、推理、數學的常識、カウンツ氏、大伴氏、初等教育研究会等のもの。

#### C 好惡とその理由

一つの事實を或る子は喜び、ある子は嫌つて居るといふ様な現象もあり、教師が何氣なく行つて居ることが、兒童にはとても感じられて居るなど反省又は參考資料となるものが多い。特に兒童の情意方面の傾向の傾向を知るに最も有効である。

更に主要な教材については指導に際し、又は指導中理解度、困難度、謬因、謬型等の調査を行つて指導を有効ならしめ度い。

#### D 指導前の調査

それ以前の基礎的、要素的なものについて（常に行ふ必要はない）

#### E 理解度の調査（困難度も知る）

基本的なものについて、得點分配表、圖代表値、理解度

#### F 謬因、謬型（Eと同一の調査で行ふ）

これは學級として、個人としての二面。

この詳細の方法なり、實際の結果なりについては別の機會

七一



に發表させていたゞき度い。  
紙面に制限があり、書く材料に限りがないから。

調査を指導に生かして

調査はよりよき効果を擧げる指導に資する爲めのものである故、之を荷に思ふ様では駄目だ。この結果を正しく解釋して正しい指導へと生かす事は出来ない。その爲には指導者の力の向上と、たゆまない努力の繼續とが必要だ。「よくやるな。月給があがるぞ。」あざけりの響が感じられる言葉がお互の間に生れてゐる様ではまだくである。

要するに子供の力を知ることにより、教材の難點と、個人差に應じて、時間と、指導力とを公平に分配して自覺的に、努力點につき進み得るといふ點に、調査に基づく指導のねらひ所があるのである。

更に言へば教師先づ自發的に、探究的に計畫的に、繼續的努力的に進む所に、無形的な尊いものを子供に感じ得させることが出来はしまいかと思はれるのである。

(昭和五・一〇・五)

お辨當の『おかず』

蝗虫食の獎勵

蝗虫は動物學上節足動物に屬し蝦と同屬のである。蝦は食料として賞味されて居るが非常に惡食であるが、蝗虫は稻の葉のみで食する清潔なものである。

蝗虫の組成成分を分析した百分比

水分	八四〇	脂肪	一九四	蛋白質	二五〇七
纖維	三四一	灰分	一二四		

(理學博士八木誠政氏に據る)

蛋白質含量の豊富なことは米の約二倍半であるのみならず、此の外に多量のビタミンBを含んで居る。稻の害虫であり、滋養價の豊富な蝗虫食を獎勵することは一舉兩得である。

調理法

蝗虫を布袋に入れ緊く口を閉ぢ、熱湯を漉いで殺した後、翅と脚とを取り清水で洗ひ、能く水を切り鍋に入れ、左の割合に調味材料を加へ、押蓋をなし重り石をのせ、約二時間煮る。其の間時々鍋の中をかきまはす。

蝗虫一升 赤ざらめ糖百匁 鹽一掴み 醬油二合

煮た後調味液の少し残り居る位の時に火より下し、殘液の見へなくなるまで暫の間かきまわす。斯くして出来上つたものは冷却するに従つて「シャリシャリ」したものとなる。此の方法で出来上つたものは五六ヶ月保存し食料に供し得るが、若し其の間に乾燥せばよい「カサ〜」となつた時は、隨時水飴又は砂糖醬油で煮直せばよい。之は學校生徒の御辨當の「おかず」として最適當であるのみならず、一般家庭の副食物としても優良なるものである。これは愛甲郡學校衛生協會長青木孝太氏の研究である。

高二幾何教授方法概論

高座・鶴嶺校 内山彦太郎

教授者の識見確立

といふことが第一條件でありた。如何なる科においてもさうであるが、教材難、時間の制限を持つ幾何教授、特に社會に出ようとする本學年においては痛感させられる。根底のないものがどうして確實な効果を生み得ようか。教師はしかと識見確立をなして教室に望むべきである。然らば之が識見確立は、讀書することによつて學者先輩の研究を参考とし、自らは體験によつて立案準備することである。

兒童觀

の必要がある。種々なる方法によつて勞を惜しまず兒童を觀なければならぬ。私は次の三方法によつて兒童を優、中、劣に區分し教授に加減をする。

- 1 高一成績による。特に幾何は作圖・證明・技術に分けて考查する。
- 2 ウイルクク的空間認識の發達段階による。即ち理想的段

階、客觀的段階、思考的段階の何れに屬するか。

3 環境による。即ち自然及社會、學校、家庭が如何にあるかは本科教授に大なる影響がある。

教材觀

教壇に立つ前には教材觀を確立しておかねばならぬ。私は子供となり、教師として考へ、之が確立をなす。

子供となつて、作圖・證明・技術・實驗・實測は、教師として、價値、縱横系統、難易、時間、兒童になんといつても教師は苦しまねばならぬ。苦なき教材觀は熱なき教授となり、兒童に興味を興へ得ぬだらう。

教授

さて壇上にて如何に戦ふべきか。私は時間制限されてゐるこの教材では、漫然と兒童の目的に添ふとして自由に時間を過ごさせることなく、教師の思ふ壺(當然兒童の要求と合致する)に入らしめる様にすべきである



1 豫備教授 敢て必要とではなく教材による。特に次の効果を必要としたる場合になすべきである。

基礎的觀念の明確

効果

性質關係を發見せしむ

性質關係の原因を知らんとする欲望を起させて證明の必要を感じしむ。

2 教材は環境からのものとして課せと叫びたい。兒童は形に固着しないで事柄に固定するものである。兒童を取り巻く形の世界に兒童を導入することは單なる形を傳達するよりも困難である。この理由からして幾何學では模型から初めないうで、實際の事物から初めなければならぬ。この事は單に出發の方法のみならず、又直觀の方法でなければならぬ。これによつて形が表現されるのである。即ち自然と人工から成る本當の對象を直觀手段として用ひ、第二次のものとして模型をば説明の手段に用ひるのである。

獨逸國民學校の教師の參考書となつてゐる P. Mathis und O. Schmidt: Raumlehre, は三卷に分たれて、其一卷は住所を題目とし、其二卷は原野、第三卷は都市を題目としてゐるこの内容を摘録したいけれども紙面の關係上省き、代りに

「數學教授新思潮」黒田氏著に摘録があることを書添へる。

3 證明

とは  $A \parallel BB \parallel C \therefore A \parallel C$  に於いてBなる媒介を見出すことに外ならぬ。

A 直觀的實驗實測的であることは今更言ふまでもないが併し實際にはあまりに之に反して取扱はれてゐる様に思ふ私は次の三項を心して兒童の前に立つ。

教材の本質から出た直觀的實驗實測的であらねばならぬ併し叫ばれるが爲になすのであつては、よし同方法に教授されても結果に大なる差を生ずる。

間に合ふ主義であつてはならぬ。誰も見ておらぬから、誰も責任を問はぬから、大した効果はないからと言ふ氣持ちで模型等を準備せずして教室に望んではならぬ。幾何そのものに惡結果をきたすは勿論、教育上に大なる惡影響を及ぼすを知らば當然間に合ふ主義ではならぬ。

簡單なる問題で半以上の兒童には不必要であつても、半以上の兒童には必要であることを何時も忘れてはならぬ。

教具を作ることの注意を擧ぐれば

(イ) よく教材の連絡を考へ、一つの眞理を説明するものだけでなく、或形から他の形への移動と相異點について注意を促がすものでなければならぬ。一つ形、一つの眞理から他へ發展する過程を考へしめるものであること。

(ロ) 固定的であつてはならぬ。想像を限定するものならぬこと。

(ハ) 生命あるもの 既製品を買ふ必要はない。不出來なものであつても兒童の作つたもの教師の作つたものでありたい。自分で作つたものなら彼等は喜んで研究する。又作る時に種々の定理を知ることになる。併し作るべきものだと思つてはならぬ。前項にも言つてる様に教具は第二次的のものである。例へば球の模型にせよ、木製のもの必らずしも効果があるとは限らぬ。却つて橙やゴム毬の方が兒童は興味を持ち、効果の大を得ることが出来る。

B 論理的證明 とは小學校にありてはその解釋を異にするものでなければならぬ。ユークリットのものでなく、直觀的實驗實測的により媒介なるBを發見せしめるもので

ある。記述は出来る丈論理形式にせしめることだ。然らざる時は兒童は復習するに困難を感じ、整理して腦裡に入らしめることが出来ぬ。又教師が考査するにも當惑する。併しこれが指導は高一より訓練付けることが大切だ。難問にありては口頭なり文章なりによつて發表せしめる事に止めねばならぬ。併し定義や證明に際しての陳述は、精確に作られ且精確になされなければならぬ。それが偶然兒童の言葉なるの故に不精確を許してはならぬ。兒童に精確を要求することは決して困難でなく、心理學上の法則にも違反はせぬだらう。

結 論 雜然たる氣分で教室に向つてはならぬ。時間には少い、教材は難かしい、駄口を言ふ時間はないのである。

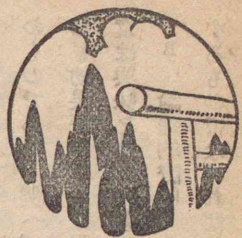
附 言

紙面の制限により教材にふれず、まづい理屈になつたが諸賢の御批正を請ふ。

### 修學旅行地としての

## 多摩御陵及び高尾山案内

横濱第一高等女學校 笹子武夫



**多摩御陵**——浅川驛……段丘……門前町……南浅川……多摩御陵……十里の古戰場……庵の山  
**高尾山方面**——距離と時間……川原宿……家内工業……小佛峠……小佛窟……高尾門前町……注意二  
 三……飯盛杉……薬王院有喜寺……見晴臺……丹澤山塊……相模の横山……多摩丘陵  
 ……多摩丘陵の成因……城山……八王子城……昔の城下町……八王寺合戦……戦後  
 の八王子……琵琶瀧……登山鐵道……完全装置  
 見晴臺から與瀨へ……大ダルミ展望臺……交渉するには

### 多摩御陵

#### ●浅川驛

中央線浅川驛で下車するから、まづ此の邊から説明をしよう。

驛の直ぐ前にこんもりとした小山があるがその松林の前に赤屋根の文化的な建物が見え

「あゝよい所だ」と誰も思ふであらう。それは帝室林野局東京支局横山出張所兼林業試験所である。その右後あたりが十里の古戰場であり、御陵はそこにあつて居る。浅川驛のあるところは、多摩丘陵の北縁にあつて居る。驛の前が少し坂になつて居るこれが地形學上見逃がせないところである。

#### ●段丘

つまり多摩丘陵を南浅川が侵蝕して造つた侵蝕段丘から下の段丘へ、即ち南浅川が運搬してつくつた堆積段丘に下りる爲の坂になるのである。八王子市の方より来て、この驛前の宿(川原ノ宿)を通る道は即ちこの下段丘である。

御陵への表参道は甲州街道を八王子の方へ一四軒程行つて南浅川橋(御陵橋)を渡つて御参道を行くのであるが、自動車も通り、又道も遠いから近道をするのがよい。丁度三角形の一邊にあたる道即ち、驛前の坂を下つてその儘直ぐ林業試験場にむかつて進む、こゝらは箱根へでも行つた感じがする。橋を渡つて五〇米程して右折して四百米行けばもう御陵の竹垣がある。竹垣に添つて行く、例の下段丘から上段丘にのぼる坂がこゝにもあつて、間もなく御陵前に入る。

#### ●門前町

驛から二十分で行ける、みやげ物を賣る店が四五軒あるが、これこそ神社や佛閣の前に發達する都市の小さいな標本であらう。

#### ●南浅川

南浅川は面白い河である。多摩丘陵を侵蝕した南浅川は又澤山の砂礫を運搬堆積して河床を埋めて居るので、その上を流れる川の水が下に入つて、山麓を離れるにつれて水が浅くなり、御参道あたりから行方不明となる、實は伏流して即ち地下水となつて、八王子の

#### ●多摩御陵

先で地表に出て来る。八王子に井を掘ると水が澤山出るのは此の所以、八王子驛のブラツトホームにあるのは井戸水で然かも水道の様に噴出する。八王子に製絲業の發達するのも亦此れに負ふ所が多い。水無河原は近頃キャビンゲに利用されて来た。うまく自然を利用したものである。

皇祖から御歴代の御陵は殆んど畿内であつたが、この度陵墓令の御改正に伴ひ武蔵陵墓地を御選定になられた事は我々關東人の誠に有難い事である。

昭和二年一月三日、宮内省告示第一號で、御陵墓地の名稱を武蔵陵墓地となされ、地域は、東京府下南多摩郡横山村浅川村元八王子村所在の御料地の内に御定めになり、同時に大正天皇の御陵所を武蔵陵墓地の御内の横山村下長房龍ヶ谷戸に御定めになつたのである。二月八日同第二號を以て御陵名を「多摩陵」と定められ、御靈域は十五町歩程(百五十萬平方米)である。

御陵型は桃山御陵と同様、上圓下方式で臺

の直徑は廿七米、臺石から頂上までの高さ十米、上圓のさざれ石は由縁の深い玉川石が用ゐられ、周圍に杉・松・檜等の若木が美しく亦神嚴な風情を添へてゐる。右手には又松杉の古木森々と茂り、丘後には長房山の翠微が美しく、西には御料地で鬱蒼たる森林があり、更に其の後には甲武の國境たる小佛の山が聳え、北から東にかけては美しい小山が圓く或は半島狀に廣々とした畑に突出して、その先に八王子の市街や武蔵野臺地が繪の様に展開し、南浅川を隔て、考古學上の研究にもなる初澤城の山があり、誠に形勝の地である。故に此の地方はずるぶる古い時代から開けて居たのである。参道工事中古墳時代の純日本式土器も出たし、又日當りのよい一帯の地には、原住民族の住んで居た遺跡が澤山ある。御陵前の半島狀をなして居る丘陵は、イヌの堡岩だつたさうである。

#### ●十里の古戰場

からいふ形勝の地はよく戰場として利用されるもので、彼の永祿の合戦は實にこの地で行はれたものである。甲斐の信玄が小田原の

北條氏康を攻めんとしたときの戦である。瀧山城に居る北條氏照を牽制する目的で郡内岩殿山の城主である小山田信茂を支隊長として出陣させ、信玄は甲府を發し碓氷峠を越え武州鉢形、松山、川越等を経て府中から拜島に至つて陣を敷いた。

一方小山田は小佛峠を越えて川原の宿に着いたので、瀧山城に居た北條方は大に驚いて氏照の老臣、横地近藤等が選兵三百雜卒二千人を率ゐて十里へと馳せ向ひ、此處に小山田の率ゐる兵二百、雜卒九百との合戦が永録十二年十月一日に行はれたのである。

小山田は二百餘騎を五手に分けて、敵の近くと見るや急に旗本を山上に押進めた。之を見ると瀧山勢は「それ進め」とばかり攻め上らうとしたが、雨の様に弓や鐵砲が来るので近寄りかねたところへ、小山田勢の一隊が山の右方から押出したので「こは一大事」とばかり氣を失ひ出した。ところへ更に四五十騎が瀧山勢の左から後に掛らうとする。横地近藤の兩將、人數を前後に分けようとしたが時遅し、命令が意の如くならぬ、そこへ又一隊が澤添ひに瀧山勢の右手にかゝつて現れ

たので萬事休す矣である。

流石の北條勢もやられてしまつたが、林業試験場のある丘上がその中心點なのである。十月三日には小山田勢は本隊に加はつて瀧山城を攻めて、直ちに小田原に出、十月六日には引返して、三増の合戦をして大勝して、甲州に凱旋したのであるが、すばしつこい事である。

### ●庵の山

御陵前の右側に老松鬱蒼と茂つた庵の山といふ小丘がある、徳川時代初期の假名草子作者で、當時の小説家の先驅者であつた石平道人俗名を鈴木九太夫正三と稱した人の墓があつたが、庵の山が陵墓地に編入されたため、道人等の墓碑は同村字中郷小學校傍に移轉した。參道の並木……まだ並木とまでは思はれないが、これは檜である。數十年の後ははどんなにか立派になる事であらう。

### ●高尾山方面

高尾山は海拔六〇一・六米山麓の坊ヶ谷を抜く事三一〇米の低い山ではあるが、關東山

地東邊であり、急傾斜をなして居るので、平地から見ると目立ちもし又上からの眺めもよい、東京や横濱に近いので、一日の清遊を求めため、或は頂上近くにある薬王院に參拜のため登山客が多いが、地理的にも面白いところであり、又身心鍛練にも適當のところであるから修學旅行地として相應しい。

### ●距離と時間

驛から頂上の大見晴まで六〇七〇米(約一里二十町)山麓までは二〇二〇米(約二十町半)であるから、徒歩で頂上まで二時間と見歸途は一時間とみれば充分である。時間の都合で坊ヶ谷から山までケーブルカー(往復四五錢)があり十分で行けるから利用したら便利であらう。併し數百人の團體だと全部をあげるには、長い時間がかかる故、歩いた方が却つてよい。傾斜の急な杉並木の幽邃の中をエンヤラホイで登つてこそ、山の氣分も味へ心身の鍛練にもなり、登つた後大見晴で眞の快談を叫べるのである。新緑の山、秋の紅葉等ケーブルカーには味へぬ趣がある。又信仰のために登山する人はよろしく歩くべし

本當に信心したといふ満足は味へるであらう 歸途七八百米下つた所に茶店(楓月亭)があるが、それを右に下りて(棒杭に書いてある)急な坂を下つて行くと琵琶瀧がある。瀧の前の小橋を渡つて山の裾について杉林の小徑を進めば、ケーブルカー會社の側に出て来る。同じ道を歸るより興があり、むしろ近いくらゐである。二十分も餘計に見たら充方であるでは驛から出發して順次説明しよう。

### ●川原宿

元川原であつたのを宿としたから川原宿と名づけたのであるさうだが、面白い町である緩やかな傾斜で道路も廣く心持ちがよいが、兩側に清麗な水が流れて居るのが目につくであらう。昔は町の中央を流したさうだが、交通の便利上兩側に通じたのである。つまり共用水路として南淺川の水を引いたのである。飲食器や野菜類を洗ふので汚物や洗濯などに使用する事は禁じられて居る。洗濯などにはひる水は更に各戸で裏庭の方へ引いて居る。そして下水は右側の家では川に流し、左側の家では畑などに引いてある、もとはこの水を

飲料水にも使つたが、今は皆井水を用ひて居る。井は大抵裏にあるが、深さは凡そ五米か六米である、何故だらうか。つまりこの宿は南淺川につくつた下段丘にあるので、南淺川の水位まで掘らねばならぬ下段丘の高さは約四米位なので、丁度五六米の深さが適して居るのである。上段丘は更に四・五米程高いので、驛にある井は四十尺もある。

### ●家内工業

さて今一つ目につくのは、住宅の一部を工場として製絲業や機業をやつて居ることであらう、そもそもといふと面倒だが、此の地帯は桑畑の非常に多いのでも知れやうが、養蠶地帯である。それで此等の家内工業が發達したので、中には電動力を以て十數人の女工を使つて大規模にやつて居る家もある。一寸寄つて見せて貰つたらよからう。此等の織物が八王子市から市場へ賣出されるのである。

### ●小佛峠

中央線のガードを潜ると間もなく右折する

### ●小佛層

地質學で有名な小佛層と言ふのは獨逸のナ

### 縣民讀本

愈々縣民讀本が發行さるゝに至つた。菊版四二二頁高雅堅牢の裝禱、四號活字を主とし五號活字が加はり、寫眞・圖表・繪畫・地圖類が六十八葉挿入としてあり、卷首に神奈川縣地圖、卷末に神奈川縣產業圖が入れられてある。配布定價は四拾錢といふ破格的廉價である。

……縣民相互の理解を増す爲に、縣といふ團體の歴史・地理・宗教・人物等精神的生活の過去と現在とを詳かにし、又其の利害の共通なる所以を悟らしむる爲に、財政・經濟・産業等の物質的生活の現狀を知悉せしむるは蓋し公民教育・社會教育として必須の事項である。

……これ序文の一節であるが、本書著述の主旨が茲にあると思ふ。本書は勿論縣民一般に愛讀せらるべきものであるが、實補・育訓生徒男女青年團員男女中等學校生徒の好讀物であり、専門的記事も相當ある點から、市町村吏、中小學校教職員其の他一般有識者の好參考書であると思ふ。

内容と相俟つて印刷體裁のすつきりした堂々たる本書は、必ずや學校・團體其の他個人的にも多數の購讀が有ると信じてゐる。

購讀申込は神奈川縣廳教務課神奈川縣教育會若くは該所の横濱市中區蓬萊町二ノ三〇神奈川縣國定教科書特約販賣所へ。

ウマン教授が名づけたもので、小佛峠の邊から東は五日市附近に及び、西は甲府盆地の東邊にまで及んで、秩父層の分布區域の南に、東西に延びて居る一帯の地層であつて、主に硬砂岩、細粒砂岩、礫岩、粘板岩の五層から成つて居る。石灰岩を含まぬのが秩父層と違つて居る。ナウマン氏はこの層は秩父層より古い古生代の一地層であると考へてゐたが、今では、多くの學者が、中生代のジュラ紀に屬する地層であるといふ説を信じて居るやうである。この層からまだ、證據になる化石が発見されない事が學界の恨事だと謂はれてゐる。

### ●高尾門前町

さて高尾に向つて進む。右から入つて来る川が小佛川、橋は上栢田橋である。道路に添つて流れて来るのは案内川と稱するが小佛川と合して南淺川となるのである。

高尾山の案内人が此の邊から多く出るのでこの名があるのか、一寸面白い河名ではないか。いよ／＼麓の坊ヶ谷戸に着く、何を研究して歩いたらよいか。尤も今まで来た道の兩側にある家は何んの商賣をして居るかといふ事にしたら便利である。

ふ事を調べながら来たとすれば、明らかに門前町の色彩の濃厚なのかわかるであらう。東京高師教授の田中先生の御調査に依ると、高尾山參拜者の營業が全戸數の七二%で其の内譯は茶店二四%、土産物繪葉書、力餅、羹干三七%、登山杖専門五・五%、旅館兼料理屋二・八%、交通乗合自動車二・八%、自轉車預所一・一%である。坊ヶ谷戸の營業狀態を調査したら面白い結果となるであらう。

### 注意二三

いよ／＼老樹鬱蒼たる急傾斜な道となる。「團體諸君!!便所はフールカー會社の利用して登山の御用意」とでも言ふべき所か。兎に角一休みして、落付いて上り終へ。約十丁程上ると道が二つに別れて居るが、左に行

### ●飯盛杉

く方が樂である。尤も落伍者は右に登ると景色のよい武藏野臺地が見え、遠く立川の飛行場まで望める、見晴茶屋があるから此處で待つ事にしたら便利である。

山上の境地に近く、左に老杉があつて五米五〇の圍りがあり、更に數十歩で六米一〇といふ大杉があるが、得難い天然記念物である。

電線の肌もあらはに朽ち古りぬ家の裏かけこぼろぎの鳴く

### 木犀の香

都筑・山内第一校 石原日の出

勤め終へて家に歸ればほんのりと本犀の香の漂へる部屋  
 實習の畑に熟れし南瓜煮て子等に食べさせす學び舎のひる  
 ほころびのあとのみ黒く日に焦けて裸になりし子の香  
 おかしき  
 すんなりと無邪氣に育ちし少女子の哀れ病に勝てず逝  
 きにし  
 いつしかに吾子は目覺めて幌蚊帳の裾をゆさゆさ動か  
 しおるも  
 戸をくれば夜は明けおりて朝風の涼しく吹くに兒は泣  
 きやみぬ

### 短歌

### 秋 雜 詠

横濱・神橋校 子安 武夫

分讓地の山の片側切り割かれ現はれ地層に入日あかあかし  
 庭隅をはびこる草は實をもちて眼底に傷む秋の眞澄陽  
 高原に冷氣は落ちて響かよふラツパの音にこころすませり  
 煤暗む小部屋の花かげ一束の花瓶の豆菊影を落せり  
 から風に落葉吹かれて夜の路は遠々しくも御會式歸る  
 ひたむきに本購る生徒等の眼ざしに何の吾が身に惱み  
 あるべき  
 飽き飽きて仕事片附かず続けさまの煙草に舌は荒され  
 にけり  
 確かと守る餘りの悲しさ他人のごと思ひ度くなりて今日  
 はあるかな

### 一輪挿の花

都筑・都田校 小島 忠治

子供らの皆かへりける教室に一輪挿の花しばみたり  
忘れし子供の帽子手にとればつぶらなる顔浮び出で  
來ぬ

さやかなる月の光にプラタナス影くつきりと羽目にう  
つせる

あてどなくさまよいしはて人氣なき河邊に立ちて流れ  
みて居り

◎十月の歌（ノートの端に書ける歌をあつめて）

### 秋

津久井・牧野校 小山倉之助

秋雨の軒に音なく雫して庭のコスモス紅に咲きたり  
子等と共に林分け入り茸とれば叫びよろこびおどろき  
の聲

澄める月松の葉末に夜はたけて衣手寒し雁かねの聲

### 俳句

都筑・高田校 八城 文雪

新涼や一氣に坂を駈け上る

立秋や此の道通る十餘年

和やかにコスモスが浮く陽の流れ

駈けたがる馬支へ行く今朝の秋

深呼吸する眼に遠く罽雲

一路盡きて只見る露の時雨哉

夜の雨に萩しどけなく明けにけり

勅語 謹寫

子等の誠意新涼の室に満つ

校 戯

秋晴るゝ庭や投げ次ぐ輪の光り



### 家事裁縫の指導をうけて

熊坂 ユウ

去る九月十八日某小學校に於て開かれた家事裁縫の研究指導をうけて、つまらぬ私感の一端を述べ、後半に小さき體驗をのせて諸賢の御批正を仰ぎたいと存じます。

先に斯界の權威者山本、本間兩師の論說により、斯の科の一大覺醒を促された折から、さぞかし此の度の研究指導も熱あるものと期待しつつ居りましたが豫期した通りなかくの盛況であつた。

私の強く感じましたことは某小學校長の裁縫科に對する批評である。教材は最も兒童に難解な鉤鉸裁であつたので、教授者としては此の難教材を如何に取扱つたらよいか、各自の意見を聞き、講師の指導を仰ぎたかつたのでか

ゝる教材を選ばれたのであらう。

よく山本先生が云はれて居る、此の科に對する男子の言は、如何に研究が深くいらつしやる方でも日常の生活が全く此の點には疎遠である故にその眞髓迄は解し難い。さればその言は恰も火事の程度を知らぬ鐘の亂打に等しいと。裁縫科そのものに當つて日夜心勞を碎いて居る私達の言も聞いて頂きたい。

吾々の程度から見ると何でもないやうなことであつても、かの未成熟な兒童にとつては甚だ難解な事なのである

二回でも三回でもかんで含めるやうにしても尙わかない場合がある。私もこの所をつい二三日前取扱つたばかりの教材なのである。裁ち方も豫定した時間より一時間延び、はては二時間も延長してその徹底をはかるべく苦心したのである。自分は教壇に立つて、之を教授しながら難解なところに至つて一向に動かぬ兒童を見てふと考へた。

『そうだ。こゝで上すべりをして行つてはいけない。自分は此の兒童達の味方なのだ、此の六ヶ年の義務教育を終つてそのまゝ社會の荒波に飛出し、みにもまれなければならぬ兒童も多くあることだらう、眞に吾々はこの可憐な子供達の味方となつてゆかねばならぬ。尋常科を出たゞけで、自分の着物（本裁女物單衣）だけでもしつかり裁つ

て縫へる様にしてやらねばならぬのだ  
これさへしつかりわかつて居つたなら  
他のものもこわして見てもわかるだら  
う」と、腹の中では泣き、顔には笑み  
をたふれども聲はふるへて、人に語  
られぬ苦しみをしてやつたばかりの教  
材なのである。それだけにどんなにか  
此の度の實地授業に身がはいつたか知  
れぬ。

多くの人の御批評に發せられず、私  
が一人體驗し考へて居りましたことの  
小事を述べて見る。

第一 着古したる衣服の解き方（實際  
より理論に導く方針）

第二 裁切衿下りと出来上り衿下り並  
に衿下と衿下との區別（特に此  
の度の實地授業を見て感じさせ  
られたこと）

第三 布の過不足の處置について（棒  
衿を教授したる場合に授く）

第一に私は此の教材を取扱ふに際し本  
裁女物單衣の解き方をやらせた、之は  
農村の忙しい家庭では材料を揃へる爲  
には非常によい方法として居る。解き  
方の順は、教師が説明しながら二人に  
一枚宛持たせて、次の縫ひ方に少しは  
参考になるやうに縫つて来た順序の終  
りから丁度あべこべに解くのだと云ふ  
ことをも附け加へてやつた。解き方は  
一齊に行ひ、一時間ですみ、第二時に  
は之を解いた糸を以て假に各部分の總  
合を試みた。解いた中には棒衿も鈎  
衿もある。こゝで兩衿を比較して兒童  
によく觀察せしめ、その名稱を授けて  
各自自由に總合する様工夫せしめて見  
る。兒童は非常に興味を持つてありつ  
たけの心勞を注ぐ。そこで  
教師「いつも裁つ時には何から初め積つた  
か」と問ふと、  
兒童「袖からとりました」と答へる。

教「袖、次は何をとりました」  
兒「身頃です」  
教「身頃、次はこの残つたものだね、これは  
何でせう」  
兒「衿と衿です」  
教「そうですネ、よく知つて居りました」  
兒「先生私のは同じ切れでこんなものもあり  
ます」

教「それはどこについて居りました」  
兒「おしりのところにです」  
教「何だかわかりますか」  
兒「敷當です」  
教「そう居敷當ですネ」  
よく覺えるやう一同に云はして見る。

教「この衿と共衿衿は之はこの様に半巾です  
ネ。之をつなげて一巾に長くなる様工夫  
して御覽なさい」  
と云ふと、兒童は非常に興味をもつてくる  
鈎衿などは布をあちらにやつたり、こつちに  
やつたり無我の境に入つたかのやうに考へて  
初めて發見した時には、コロンブスが新大陸  
でも發見したかのやうな満足をもて教師に訴  
へる。

兒「先生出来ました、これでいゝでせう」  
教「そうです、よく考へましたネ、未だわから  
ぬ人は何々さんを見せて戴きなさい」

兒童は何だと云ふたやうな顔をして成功し  
たのを見又一生懸命に始める。

そこで早く出来上りました棒衿裁と鈎衿裁  
との總合されたものを教室一ぱいに開け、一  
両手をやめさせて置いて、布の比較をさせて  
見る（長さの長短をしつかりと）これやがて棒  
衿裁がすんで鈎衿裁に入る時の豫備にもなる  
のである。

次に鈎衿は一時しまつてをいて、棒衿のみ  
を開けてをき、  
教「この實物の總合したのを見て圖解でき  
ますかネ」と問ふてみる。

兒「ハイ書けます」  
一同一生懸命に研究する。はてはノート迄  
持つて来て書き初める兒童もある。實に面白  
い。その内第二時間目の時限が来たので、  
教「ではこの裁方の圖解は宿題としませう。」  
とやめてをく。時間が了つて遊ぶ時間迄もそ  
の各部を總合した反物を見て非常に熱心に考  
へてをる。

次の時間（第三時間目）の初めに  
教「此の前の宿題をやつて来ましたか。」  
兒「ハイやつて来ました」

元氣がよい。丁度一學級三十五名の内最も  
劣等とする兒童が二人書けなかつたのみであ  
つた。けれども此の三時間目の總用布の出し  
方で（各自の解いた實物の寸法によつてやれ  
ば面白いであらう、こゝは便宜上、一定の普  
通寸法を用ひてやらせた）衿下りの點で非常  
になやまされゆつくり一時間はとられて了つ  
たこゝで前記第二にあげた點によく注意して  
授けたいのである。

次の第四時は布の過不足の處置について、  
初めていつた。  
教「一反の反物は此の前の時間に皆さんが積  
つたその丈とは定まつて居らないもので  
ある。少し短い時もある、長い時もある。  
大へん短い時もあるれば又大へん長い  
時もあるのです。そこで  
一、五糎短かつたら  
二、十糎長かつたら  
三、貴女方の着物で元祿袖にし、七八十糎  
も長かつたら

四、あべこべに七八十糎も短かつたらど  
うします

各問題一つ々々兒童いろいろの考へを述べ  
る。おかしうて笑つて了ふこともある。  
最後の四の問題に來た時、兒童の考へとし  
て先の各部分を總合したことを思ひ出し、  
兒「先生鈎衿に致します」  
一同「そうです」  
教「よく覺えて居りました、そうですネ。鈎  
衿裁にしませう。どんな風に裁つてあり  
ましたか」

兒童はおぼろげながら裁ち方を記憶して居  
ることから鈎衿裁には入つて参りますと非常  
に難なくすらすらと進まれると思ふ。所謂實  
際から理論にはいつたものであります。  
元來裁縫科は、他の學科に比すれば  
極めて地味な教科である。故に此の授  
業そのものもはな／＼しい授業には不  
向である。研究授業の際は教授者の心  
血を注がれて居る、それを見て頂きた  
いと存じます。



# 世界教育思潮大觀 (續)

都筑・都田校 野 路 當 作

## 第七 個人主義

### (一) 個人主義の起源

原始社會、古代社會に於ては、個人よりも社會の方が重んぜられて、個人の自由は殆んど重んぜられなかつた。教育學上始めて個人主義の唱へられたのは希臘の詭辯學派であつた。彼等は『萬物の尺度は個人なり』といつた。併しながらギリシヤは概して國家主義であつた。スパルタ教育はその尤なるものであつた。後ギリシヤが衰へて來て、國家も國民の信頼を失ふやうになつてから、個人主義的思潮が現はれて來た。ストア學派、エピキュラス派、懷疑學派等は之である。

### (二) 基督教の個人主義

ローマ帝國の腐敗によつて、階級の別、貧富の差の大きな

るに至つて基督教は、個人の自由解放を主張して個人主義を標榜した。此の教は人類は平等に、唯一神(天父)の子であるとし、教育も平等に享くべき權利あるものとしたのである。

### (三) 近世初期の個人主義

近世に至りて、中世紀一千年間の傳統を歐洲國民は破毀し、一は良心の自由、一は知識の自由を提唱し、前者は宗教改革となつてあらはれ、後者は所謂人文主義となつた。ルーテル、ラトケ、コメニウス、モンテーヌ等は大いに社會方面は重んじたけれ共、また大いに個人の權威を尊重したものである。

### (四) 十八世紀の個人主義

此の世紀は啓蒙一洗の時代で、理性萬能主義で、個人主

義が最も盛な時代であつた。宗教と政治とは非道く叩きつけられてしまつた。ルッソーは其の代表者であつた。

### (五) 十九世紀の個人主義

前世紀の如く歴史を無視し、且つ孤立的な個人主義はなくなり、ナポレオン出現以來國家主義、國民運動盛となつたが、併し個人主義は依然ある種の力を保つてゐた。

### (六) ニーチェの個人主義

ニーチェ(一八四四—一九〇〇)スチルナー等はその尤なるもので、現在の道徳を奴隸道徳となし、基督教及び民主的國家に依て説かるゝ類ひの道徳は弱者保護の具であつて之れ亦奴隸道徳である。之に反して自己の主張せる道徳は君主の道徳なりとし、宇宙に於ける究極實在と個人にとつての至善は實に力の意志なりとした。

### (七) ニーチェの影響

有名なスエーデンのエレンケイ女史の『兒童の世紀』はその最も影響されたる教育説である。

### (八) トルストイの教育思想

ヤサヤナポリヤナの自由學校は之れである。

### (九) モンテツソリーの教育思想

伊太利のモンテツソリー女史の『兒童の家』は之である

### (一〇) バートランド、ラッセルの教育説

現今英國の社會改造家ラッセルも亦個人主義的な教育説をのべてゐる。

### (一一) 東洋に於ける個人主義

その純粹なものはないが、國家の爲めに個人を伸ばす事を説いた細井平洲の如きものはある。

### (一二) 個人主義の將來

個人の權利を尊重し、教權中心より兒童中心にしん／＼として進みつゝある現今の様様より見て、益々榮えるであらう、たゞ放任を許すが如き事さへなくば、誠に多くの長所ありと云ふべきである。

## 第八 社會主義 (經濟上ではない)

### (一) 社會主義の起源

主として十八世紀の極端なる個人的思潮の反動として起つたもので、殊に國家の權威が高まり、社會學等が完成す

るにつれて益々發達した。つまり『社會の爲めの個人』とあるので、將來はますます行はれるであらう。  
いふ思潮である。

## (二) ヴイルマン

一八九八年に公にせる『教育の科學的成立』中に『教育とは小なる野蠻人を化して開化人と爲す事業にして、畢竟兒童を歴史化するもののみ』と云つてゐる。

## (三) ベルゲマン

『社會的教育學』として我が國に専ら紹介せられたものであつて、社會を離れて個人は存在せず、個人といふことは單なる抽象觀念にすぎぬといつてゐる。

## (四) ナトルブ

個人は單なる抽象にすぎず、恰も物理學者の原子に似てゐる、人は唯だ人間社會に依つてのみ人となることが出来る。教育するものは獨り社會のみである。

## (五) デューイ

米人にして『學校の社會化』を強調する。現今世界教育學界の第一人者である。

## (六) 社會教育主義の將來

個人主義と長短相反する所から、互に補欠しあふ關係が

## 第九 國家主義

### (一) 國家主義の起源

古代の教育は概して國家主義であつた。そして治者階級のみ教育であつた事は東洋西洋をとはず同じであつた。

### (二) 古代及び中世の國家主義

ギリシヤの都府的國家の教育は、概ね國家主義、軍國主義で、スパルタはそれであり、アゼンヌも文化的國家主義であつた。後詭辯學派の個人主義も現はれたけれ共、ソクラテス、プラトン、アリストテレス皆國家主義をとつた、中世紀の基督教は、政權と結付いて本來の個人主義から國家主義へと轉じてゐた。

### (三) 近世の國家主義

ルツテルは宗教改革を起し、一面個人の信仰を教會より解放せしめ、他面に於て國家を教會より獨立せしむべきを主張し、國家が國民の全體を教育すべき事を主張した。

### (四) フイヒテ

『獨逸國民に告ぐ』の中に、熱烈なる愛國の至情を湛え、

その國家的教育によりて、ナポレオンの戰禍より再生せんことをすゝめてゐる。

## (五) ヘーゲル、フイーエ (略)

## (六) 公民教育

近時、獨逸の公民教育運動は終に世界的になつた。ケルンシュタイナー氏は其の權威であつて、勤勞作業と共に世界的新教育主潮となつた。

## (七) 東洋の國家主義

之は云ふまでもなし。

## (八) 國家主義の將來

國家主義の教育特色は、劃一と能率とに存し、其の理想主義的根據に立てるものは、國民文化の維持向上を教育の一大任務となす點は今後の教育に於ても大いにとり入れねばならぬ。たゞ兒童の個性をかへりみず、教權萬能になる弊はつゝしまねばならぬ。

## 第十 國際主義

### (一) 國際主義の起源及發達

此の主義は必ずしも新しくはないが、併し大戰後特につ

よくさげられるやうになつた。政治的にも、經濟的にも、教育學的にも、併し未だ發達の過程にある。

### (二) 其の將來

今後大いにとり入れて行かねばならぬ事は言を俟たぬのである。

以上は主なる世界教育思潮の展望である。人類始まつて何千年、東洋、西洋共に幾多の教育思潮がその時代の精神を反映しては、消長しつゝ進展して來た。我が國の教育は勿論『國家主義』でなければならぬ。けれ共その細かい點に到つては幾多の他の主義の長所を採つて、以つて時代の進運に伴ふべきものとして行かなければならない。

とにかく私達は世界に現はれた教育思潮を通覽する事によつて、偏頗なる教育觀に墮する事を避けると共に、益々私たちの教育に深味と清新味とを附與せねばならぬと考へる。(終)







# 第廿六回關東聯合教育會

昨年十月本會と横濱市教育會との共同主催を以て開會したる關東聯合教育會は、其の第二十六回を信濃教育會主催の下に十月十八日より三日間、長野市に於て開會した。本會よりは豊田師範學校長、小泉大磯小學校長、高城主事の三名、本縣各郡市教育會よりの横濱市の新堀源兵衛氏外二十九名出席した。

未曾有の經濟國難に際し殊に生糸暴落の大影響を蒙り、小學校教員減給其の他種々の問題を惹起したる長野縣に於ての此の會合は頗る世人の注意を喚起したが、會議は案外平穩に経過したのは流石教育家の會合であると感じしめた決議せられた事項中注目すべきもの左のやうである。

## 時局に對しての宣言決議

### 宣 言

熟と惟ミルニ明治大帝維新ノ宏謨ヲ定メ明治二十三年畏

クモ教育勅語ヲ下シ給ヒシヨリ徳教ノ基茲ニ定マリ以テ維新ノ大精神ヲ發揚シ前古未曾有ノ國運ヲ將來セリ然ルニ方今世態ノ變移ニ伴ヒ浮華放縱ノ習漸ク萌シ思想動モスレハ輕佻奇激ニ流レ醇厚中正ノ美俗亦頽廢ニ赴カントス、加フルニ時局ハ異常ノ經濟國難ニ際シ民心ノ動搖轉寒心スヘキモノアリ

時偶と教育勅語渙發四十周年ニ際會ス

願ミテ吾人ハ過去四十年聖旨ヲ奉體紹述シテ教育ノ事ニ從ヒ國運ノ隆昌ニ寸効ヲ捧ケタルヲ喜フト共ニ更ニ益と聖旨ノ徹底ヲ期セサルヘカニサルヲ痛感ス

則チ吾人ハ特ニ心ヲ用ヒ内ニ犯スヘカラサル精神氣魄ヲ養ヒヨク世局ヲ達觀シ堅忍持久事ニ當リ大ニ國民精神ノ作興ヲ圖リ以テ昭和ノ聖世ニ報效ノ微衷ヲ輸サントス

茲ニ教育勅語御下賜四十周年ニ際シ敢テ宣言シ次ノ各項

ニツキ極力之カ實現ヲ期ス

### 決 議

一、教育勅語ノ根本精神ヲ明徴ニシ愈皇運翼贊ノ實ヲ揚ケンコトヲ期ス

二、建國ノ精神ニ則リ國體觀念ヲ確立シ國民思想ノ安定ト精神ノ作興ニ寄與センコトヲ期ス

三、經濟國難ノ世局ニ鑑ミ隱忍自重以テ教育ノ實際化ヲ圖リ國力ノ啓培ニ貢獻センコトヲ期ス

## 教育擁護ニ關スル決議

經濟界現時ノ不況ニ對應セントシ經費ノ節減ニ急ニシテ動モスレハ國家百年ノ大計タル教育ノ進展ヲ阻害シテ顧ミサルモノアルカ如キハ寔ニ遺憾トスル所ナリ  
因テ本會ハ時局ノ重大ナルニ鑑ミ協力一致教育擁護ノタメ左記諸項ニツキ極力之カ實現ヲ期ス

- 一、教育者ハ時局ニ對シテ充分ナル理解ヲ保チ地方財政ノ窮乏ニ善處スルト共ニ時難救済ノ先覺者タル覺悟ヲ以テ一層職務ニ精勵スルコト
- 二、地方有識者ハ教育ノ重大性ニ鑒ミ一時的ノ事情ノタメ

苟モ教育ノ効果ヲシテ低下セシムルカ如キコトナカラシムル様留意スルト共ニ濫リニ教育者ノ地位ヲ不安ナラシメサルコト

三、府縣當局者ハ非教育的ナル學級ノ整理不自然ナル教員ノ淘汰教員俸給ノ減額初任給ノ引下等教員ノ地位ヲ不安ナラシムル問題ニツキテハ慎重ナル考慮ヲ拂ヒ且ツ教員需給ノ調節ヲ圖ルコト

四、文部當局ニ於テハ教員ノ待遇地位ノ確保並ニ教育ノ實際ヲ阻害セサル様遺憾ナキ途ヲ講スルコト

右決議ス

## 地方長官ノ權限ニ關スル建議

教育ノ地方化ヲ計リ其ノ實績ヲ高ムル爲メ左ノ事項ニ關シ地方長官及學校長ノ權限ヲ一層擴張スルコトヲ其ノ筋ニ建議スルコト

### (一) 編 制

小學校ニ於ケル一學級ノ兒童數ノ制限ハ現行法ノ範圍内ニ於テ地方長官之ヲ規定スルモノトス

### (二) 教 科

小中等學校及師範學校ノ必須科目ハ其ノ數ヲ減少シ選擇  
加除シ得ル教科目ノ範圍ヲ擴張スルコト

中等學校及師範學校ノ隨意科目選擇科目及其ノ他ノ教科  
目ノ選擇加除ハ府縣立學校ニアリテハ地方長官之ヲ決定  
シ其ノ他ノ公私立學校ニアリテハ地方長官ノ認可ヲ受ク  
ルモノトス

(三) 教科課程及教授時數

小中等學校及師範學校ノ各學年ノ教授時數ハ週單位ヲ改  
メ一ケ年單位トシ各學年ノ教授總時數ノ最多最少及必須  
科目ノ各科教授時數ノ最多最少ヲ規定スルコト  
學校長ハ教科課程ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クルモノト  
ス

(四) 教科書

小學校教科書ハ文部省ニ於テ更ニ數種ヲ發行シ其ノ採用  
ハ學校長之ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クルモノトス

補習教育と青年訓練所との統一其の他に關し從來各種の會  
合に於て決議せられたる趣旨を含みたる左記の如き成案を  
作り建議すること

青年教育ニ關スル第十八號乃至第二十九號ニ至ル議案左記  
ノ通り調査報告候也

(一) 青年教育ノ對象

青年教育ノ對象タル青年ハ高等小學校卒業後他ノ中  
等學校ニ入學シ居ラサル者トス

(二) 青年教育ノ本質

一、普通教育ノ擴充タル人格教育ヲ主眼トス  
一、生涯修養ノ人ヲ造ルヲ念トス

(三) 青年教育機關

1 青年教育機關ヲ公民學校トス

一、修業年限

初等科二ケ年 高等科四ケ年 研究科五ケ年以内  
但シ土地ノ事情ニヨリ研究科ヲ置カサルコトヲ  
得

一、學科目

修身公民科、國語、數學、實業、家事裁縫(女)  
教練トシ必要ニヨリ他ノ教科ヲ加フルコトヲ得

一、教授日數並時數

初等科	日數二百四十日	時數五百時以内
高等科	同 百二十日	同 三百時以内
研究科	同 二十日	同 四十時以内

2 設置

公民學校ハ市町村立トシ小學校ニ併設シ小學校長之  
ヲ兼任ス

3 公民學校ハ普通教育ノ系統トス

(四) 青年教育振興策

1 教員養成機關ヲ改善シ優良教員ノ養成ニツトムル  
コト

2 専任教員ヲ置クコト

3 青年教育ニ對スル社會的覺醒ノ促進

4 國道廳府縣市町村ハ本教育ノ爲ニ相當經費ヲ支出  
スルコト

感想の一二

- 一、教員給の問題に觸れたる言論の比較的少なかつたこと
- 二、一府縣よりは四五人位は毎年出席する人を出席せしめ  
たきこと。

三、長野縣の人が現實に捉れずして堂々と理想を主張する  
こと

四、信濃教育會の役員に官吏の少なきこと

五、信濃教育會が堂々たる會館を有し、而も其の會館は長  
野縣教育關係者十七八萬圓を一ケ年間に醸出して御大  
典紀念に建築したる其の意氣組の壯なること。

信濃路

うすき濃き黄に紅に映り榮えて  
信濃路の紅葉なかもあかすも

— 關東聯合教育會出席者通信より —

介紹書圖

小學教育の破壊

山崎博君著

總布金文字裝禎四六版三三四頁、忙裡讀過するには手頃の著書であります。

「教育者が餘りに觀念論的哲學的書物に親しみ、哲學的思索によつて訓練せられて來た——尤も教育の事が理想主義者でなければ出來ないことでもある。しかしながら理想主義も更に大乗的に現代の廣い社會認識の上に立たなければならぬことは理の當然すぎる程當然なことである。

かくして現代教育者は立場の改新に迫られてゐるのであるまいか、現代社會の動きに取り残されるものは、現代そして將來の教育を樹立することは出來ない。

教育者よ、教育方針樹立の用意はよいか。茲が著者のねらひ所である。著者は更に斯う言つてゐる。少くとも開拓の斧鉞が加へられて居らない新分野に向つて大膽ながら發掘の鉞を下したつもりである。と。

立場に在つて全國教育者に呼びかけてゐる。其の聲は次の様な要點によつて内容が展開されてゐる。  
「破壊か建設か」「小學教育の破壊」より「日本の教育」へと進み、茲から「現代教育行進曲」となり、民本主義教育乎、國家主義教育乎、新國民主義教育の理念、新國民主義教育の理想等を所論検討し、「教育制度の創建」より「教育の地方化」に及び「勞働の教育」「個性教育の徹底」「公民的教育」に進み、更に「日本我の教育」に於ては、新日本主義を標榜する新學校を検討し、日本民族の意識の陶冶觀、日本民族理想と日本教育理念を論じ、「日本愛の生活學校」を叙述してある。  
教育體験に即し、心を高所に立たせて今一度自分の生活である教育を……現代の教育を俯瞰して、日本の教育は斯くあらねばならぬの意識を強調すべき時機に際し、本縣教育者より本書が全國的に送り出されたことを喜

ぶ一人であります。(草風生)  
▲定價金貳圓 東京小石川區竹早町三六番地 都文書院發行

相模大山縁起及文書

本書は武相叢書第三編としての刊行であつて、大山記録や大山古文書及び大山縁起繪卷等が内容とせられてある靈峰大山を趣味的に研究するに好參考書である。

武相叢書は文學士石野瑛氏の編輯校訂に任ぜらるゝもので、本書はその三回目の刊行である。

菊版一七〇頁 圖版一二個  
定價 壹圓八十錢

申込所 橫濱市神奈川區岡野町一三一 武相考古會  
振替 濱濱文化協會東京七五〇 二七番

郷土教育聯盟

日本國土の新展望に立つて、郷土の研究と教育とを内容とした雑誌「郷土」を、郷土教育聯盟では十一月一日創刊號を發行しました。郷土を如何に觀るか、郷土研究の方法、その他何れも郷土に關係した材料で、すつきりした印刷體裁によつて誌面が盛り立ててある同聯盟の趣旨は左の様です。

郷土教育聯盟趣旨

「我々は我々の國土を今一度新しく見直さねばならぬ」と云ふ要望は、現代の世界的諸傾向に直面する國民全體の眞底からの叫びであつて、やがて、これまでの學問の方法並びに教育の仕方に對して、最も重大な傾向を暗示するものであります。

この國土的省察の要求は、既に「郷土研究」及び「郷土教育」の施設方案として、我が教育界にも喧傳されて居りますが、その限りな

き重要性は、獨り、學校教育に對する制度的革新を示唆するに止まらず、亦實に、國民の實生活を覺醒する科學的方途の基準となるべきであります。(中略)

茲に於て、私等は各方面の同志者と相諮り郷土教育聯盟の名の下に、最も小さな郷土から出發し、日本全土は勿論、世界を綜合して研究機關の一機能たる役目を果し度いと念願いたします。

雑誌「郷土」は實にこの機能を發揮する一連絡機關であると共に、郷土の科學的認識に立脚する新教育運動の旗幟であります。希くば全國同志の加盟者によつて、この運動の一大使命を貫徹せん事を

東京市神田區北甲賀町二十三

本部 郷土教育聯盟

尾高豊作

▲「郷土教育聯盟」會員規約は同聯盟に御照會のこと

▲「郷土」の發行所 東京市神田區北甲賀町二三

刀江書院

文學博士吉田靜致謹述

小供に教育勅語謹話

(兒童用) 定價五錢 送料二錢  
兒童用教育勅語も其數少からざるべきも權威ある著者、内容の豊富明快、定價の低廉等出色のものであらう。

文學博士 西 晋一郎聞  
文學士 今井秀一著

中等教育に關する勅語謹解

四六版 定價 金 拾 五 錢  
洋裝 送料 四 錢

東京帝大教授兼東京文吉田靜致述  
理科大學教授文學博士

小學校 參考用 勅語謹解

菊一冊 定價 金 壹 錢  
送料 六 錢

——教育勅語御下賜四十週年を迎へて——  
右三種東京日本橋本銀行町賣文館發行

雜 纂

保育大會開催

一期 日 昭和五年十一月二十二日、二十三  
日の二日間

一會 場 東京市神田區一ツ橋通町教育會館  
一問 題 本會提出の問題左の通り

1 保母の資格向上並待遇改善に關し  
其筋に建議するの件

2 幼稚園の普及發達を圖る方案如何

一、行事

1 議 事

2 研究發表

3 勤 績 者 表 彰

4 講 演

一、出席者資格 幼稚園長及保母

一、申込期日 十一月十日まで

一、會 費 一人に付金參圓(御申込と同  
時に御拂込のこと)但一旦御拂込の會  
費は如何なる事情があつても返戻致し  
ません

一、申込所 東京市神田區一ツ橋通町  
帝 國 教 育 會

振替口座東京一八六三一

曾根氏祝賀會

教育操觚界の先輩曾根松太郎氏が上京して  
教育奉仕の生活に精進せられるやうになつて  
から三十年目に當るので、有志の者が發起し  
來る十一月上旬を卜し、記念の會を催すこと  
になりました。

曾根氏は、明治二十五年五月 愛媛縣師範  
學校を卒業し、附屬小學校訓導となり、松山  
中學校教師に轉じ、更に郡視學の職を奉じ、  
明治三十四年、學友たる前大藏大臣三土忠造  
氏の紹介により、上京して金港堂に入社し、  
新に創刊せる雜誌「教育界」の主幹となり、  
教育記者生活の第一歩を踏み出した。爾來三  
十年、終始一貫、言論によつて教育界を指導  
啓發し、教育運動の陣頭に立ち、且つ出版事  
業を通して教育文化の發達をはかり、加之教  
育者の會合と云ふ會合には、其の發起者の中  
に曾根氏の名を見ざることのない程、社會の  
ため人のためにかくれた努力家である、教育  
界には功勞者多しと雖も、曾根氏の如く三十  
年の久しき間、専ら民間にあつて教育奉仕の  
生活に終始した人は誠に珍らしい。  
由來、民間の事業は世に顯はれることが比

講 演 者 派 遣

財團法人斯文會の美舉

斯文會は會長に徳川家達公、副會長に澁澤榮一、阪谷芳郎、井上哲次郎諸氏  
總務服部宇之吉博士、教化部・研究部・編輯部各部長に夫々宇野哲人、岡田正  
之、鹽谷溫博士があり、創立以來五十餘年常に儒教の要旨に依り、國民思想涵  
養に盡力されて來た會である。今回は特に中央及び各地方に國民精神作興の講  
演を計畫し、主催者より希望があれば左記要項に依つて講演者を派遣されます

一、派遣講師は大體一地方二名の豫定

一、派遣講師の謝禮旅費は一切主催者では要せぬこと

一、講演開催の場所は可成東京より日歸り又は一泊で往復し得る土地のこと

教育會、中等諸學校、男女青年團、其の他教化團體に於て講演會開催の場合は  
申込みある様茲に紹介致します。(東京本郷湯島二ノ一湯島聖堂構内財團法人斯文會)

神 奈 川 縣 教 育 會

較的渺ないので、かくの如き教育界の先輩に  
對して、其の功勞を謝する機會もなかつたや  
うな有様であるが、今年には曾根氏の遺曆でも  
あり、且つ教育奉仕三十年と云ふ記念すべき  
年にも當るので、曾根氏教育奉仕三十年祝賀  
會實行委員會ではなるべく盛大な祝賀會を催  
すことに決し、會の事業としてパンフレットの  
發行、記念品の贈呈、祝宴等を内定した様  
である。

山崎 博著  
小學教育の破壊

四六版三百餘頁定價二圓

鈴木憲一・平島正夫共著

小學校に於ける  
詩の作らせ方味  
はせ方

四六版二七二頁一圓八十錢

東京・小石川・竹早町三六

郁 文 書 院

學大總  
刊新最

# 發賣各縣下書店 | 刊新最

中等教育研究所編纂

神奈川縣中等學校師範學校

## 入學選抜問題と其の答へ方

▼菊版美裝堅牢  
▼定價八拾錢  
▼約三八〇頁  
▼郵稅十二錢

發行所  
日十月九

### 目要の容内

- ▼受験する皆さんへ（受験に大切な三要件）
- ▼昭和五年度の男女中等學校と男女師範學校の口答と筆答の諸問題と其の答へ方
- ▼昭和四年度の男女中等學校と男女師範學校の口答と筆答の諸問題
- ▼學習參考上の諸問題と其の答へ方

受験する身になり、指導する心になつて、受験者の良い友達であり、味方であるやう、用意の行届いた編纂!!

果然好評を拍して居ります。讀購豫想を越して多く各方面からの快報に感激を重ねて居ります。

昭和五年十月三十日印刷  
昭和五年十一月三日發行

編輯者 横濱市中區西町三ノ五五  
發行人 横濱市中區住吉町五ノ五八  
印刷所 横濱市中區住吉町五ノ五八  
發行所 横濱市中區日本大通一

横溝 今次郎  
鈴木 清五  
横濱活版會  
神奈川縣教育會

發行所 神奈川縣國定教科書特約販賣所

振替口座東京七三六六二番  
電話番號長渚町四九七番  
○三ノ二町菜蓬區中市濱横